茂木遺跡群

稲荷窪A地点遺跡

（「団体営土地改良総合整備事業茂木地区」に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ）

稲荷窪１号墳遺物出土状況

序　　文

大胡町は、上毛三山のひとつに数えられる赤城山の南麓に広がる豊かな自然があふれる田園地帯です。近年では、県都前橋のベットタウンとして様々な開発に伴って埋蔵文化財の発掘調査が行われております。

平成５年度より事業開始となった団体営土地改良総合事業に伴う茂木地区の発掘調査は、平成６年に稲荷窪Ａ地点、平成７年に稲荷窪Ｂ地点遺跡等が行われ、平成８年度まで続きます。

平成６年度の発掘調査対象区域となった大胡町の茂木地区は、旧石器時代の三ッ屋遺跡・縄文時代～平安時代の集落跡、茂木古墳群が分布する遺跡の濃密地帯であります。今回の発掘調査では、縄文時代中期の住居跡や古墳が調査され、縄文文化や古墳文化を開明する上で貴重な資料を提供してくれたものと思います。本書が地域の歴史や文化を解明する上で郷土の歴史を学習する生きた教材として参考になれば幸せです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本書刊行にあたり、多大な尽力を賜りました関係諸機関・地元関係各位にたいして、心から感謝の意を表すと共に作業にあたった作業員の方々の労をねぎらい序といたします。

平成８年３月

大胡町教育委員会

教育長　剱　持　平三郎

例　　言

1．本書は、平成６年度団体営土地改良総合整備事業茂木地区に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査地区は、群馬県勢多郡大胡町茂木字稲荷窪835・836-1・836-2・837・838・839-1・839-2 840・841・843-1・843-2番地外に所在する。

3．発掘調査は、平成６年８月20日より同年10月28日まで実施した

4．発掘調査は、大胡町教育委員会直営で実施し、山下歳信が担当した。

5．本書の作成は、編集・執筆を山下が行った。

6．発掘調査によって出土した遺物については総て大胡町教育委員会で保管管理している。

7．発掘調査から本書作成の過程で下記の方々や機関からご協力・ご指導をいただいた。記して感謝の意を表わします。（敬称略・順不同）

群馬県教育委員会文化財保護課　大胡町土地改良課（現農村整備課）　勢多郡社会教育文化財分会の諸氏　㈱測研技研　測量設計㈱　須賀工業㈱　宮崎朝雄　細田勝　谷藤保彦

8．発掘参加者並びに整理参加者（敬称略・順不同）

関谷清治　井上美代子　大原きみ子　石井よね　勅使川原幸枝　登坂うた子　小沢チヅエ
萩原秀子　菅田ツル　（故）高橋充子　奥野富子　阿久沢福造　神尾茂　鈴木久美子　五十嵐文江
横沢恵子　山下雅江

凡　　例

1．発掘区は10m区画を作り、東西方向から東に向けて数字、南北方向から北に向けてアルファベットを使用した。

2．遺構実測図の方位記号は、真北を表す。

3．遺構実測図に記した基準線は海抜で表した。

4．遺構・遺物のスケールは下記の通りである。

全体図１：800　遺構　住居跡１：60　炉址・カマド１：30
古墳全体図　稲荷窪１号墳１：80　稲荷窪２号墳１：40　主体部１：40
遺物　石鏃１：１他は１：３～４
稲荷１号墳出土の大刀１：４・装身具（勾玉・小玉・耳環）１：２

5．遺物写真は、掲載できなかった。

目　　次

序　文
例　言
凡　例
目　次
挿図目次・図版目次

Ⅰ　発掘調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 1
Ⅲ　検出された遺構と遺物 …… 5
Ⅳ　成果と問題点 …… 33

挿図目次

第1図　位置図 …… 2
第2図　周辺の遺跡 …… 3
第3図　稲荷窪A地点遺跡全体図 …… 4
第4図　1号住居跡・出土遺物 …… 5
第5図　2号住居跡 …… 7
第6図　2号住居跡出土遺物（1） …… 8
第7図　2号住居跡出土遺物（2） …… 9
第8図　2号住居跡出土遺物（3） …… 10
第9図　2号住居跡出土遺物（4） …… 11
第10図　3号住居跡 …… 13
第11図　4号住居跡 …… 14
第12図　4号住居跡出土遺物（1） …… 15
第13図　4号住居跡出土遺物（2） …… 16
第14図　5号住居跡 …… 18
第15図　5号住居跡出土遺物（1） …… 19
第16図　5号住居跡出土遺物（2） …… 20
第17図　5号住居跡出土遺物（3） …… 21
第18図　1号土坑 …… 22
第19図　包含層出土遺物（1） …… 23
第20図　包含層出土遺物（2） …… 24
第21図　稲荷窪1号古墳全体図 …… 25
第22図　稲荷窪1号古墳主体部 …… 27
第23図　稲荷窪1号墳周堀 …… 28
第24図　稲荷窪1号墳出土遺物（1） …… 29
第25図　稲荷窪1号墳出土遺物（2） …… 30
第26図　稲荷窪2号墳全体図 …… 31
第27図　稲荷窪2号墳主体部・周堀 …… 32

図版目次

PL－1　遺跡遠景（南西より）　遺跡真上から
PL－2　1号住居　1号住居炉址　2号住居　2号住居炉址　2号住居遺物出土状況　3号住居
PL－3　3号住居遺物出土住居　4号住居遺物出土状況　4号住居完掘状況　4号住居遺物出土状況（近景）　4号住居遺物出土状況（近景）　5号住居
PL－4　5号住居カマド（前面より）　5号住居カマド（前面より）　5号住居カマド（北より）　5号住居貯蔵穴　1号土坑　稲荷窪2号墳主体部
PL－5　稲荷窪2号墳全景　稲荷窪1号墳全景
PL－6　稲荷窪1号墳調査前　稲荷窪2号墳主体部入り口　大刀出土状況　勾玉出土状況　入り口部遺物状況

I　発掘調査に至る経緯

団体営土地改良総合整備事業茂木地区の実施に伴い、当町土地改良課から平成６年度事業予定区域が提示された。教育委員会は、遺跡の範囲確認を試掘調査によって実施し、工事概要に即した取り扱いを協議したい旨を伝る。８月に試掘調査を行う為の協力を地元に依頼し、遺跡の存在が推察される地域に試掘調査を開始。その結果に基づき、工事概要から調査範囲を確定し、９月に土地改良課より提出された埋蔵文化財発掘調査についての依頼文を受諾。同事業の着工前に発掘調査を行い、記録保存を図ることで合意した。

II　遺跡の位置と環境

赤城山南麓に広がる雄大な裾野上に立地する群馬県勢多郡大胡町は、赤城山の形成過程の噴火活動にともなって流失した火山噴出物によって形成された台地と荒砥川等の中小河川の開析谷が複雑に入り組んでいる。標高は120～640mの範囲にあり、520mの高低差がある。本遺跡〔１〕は、大胡町街区の南方に位置する大字茂木地区にあり、上毛電鉄大胡駅の南南西約1.5mで、地形的には東西を谷地地形に挟まれた舌状台地上に立地している。北方に続く台地上には、平成７年度に発掘調査された稲荷窪Ｂ遺跡〔２〕が存在する。

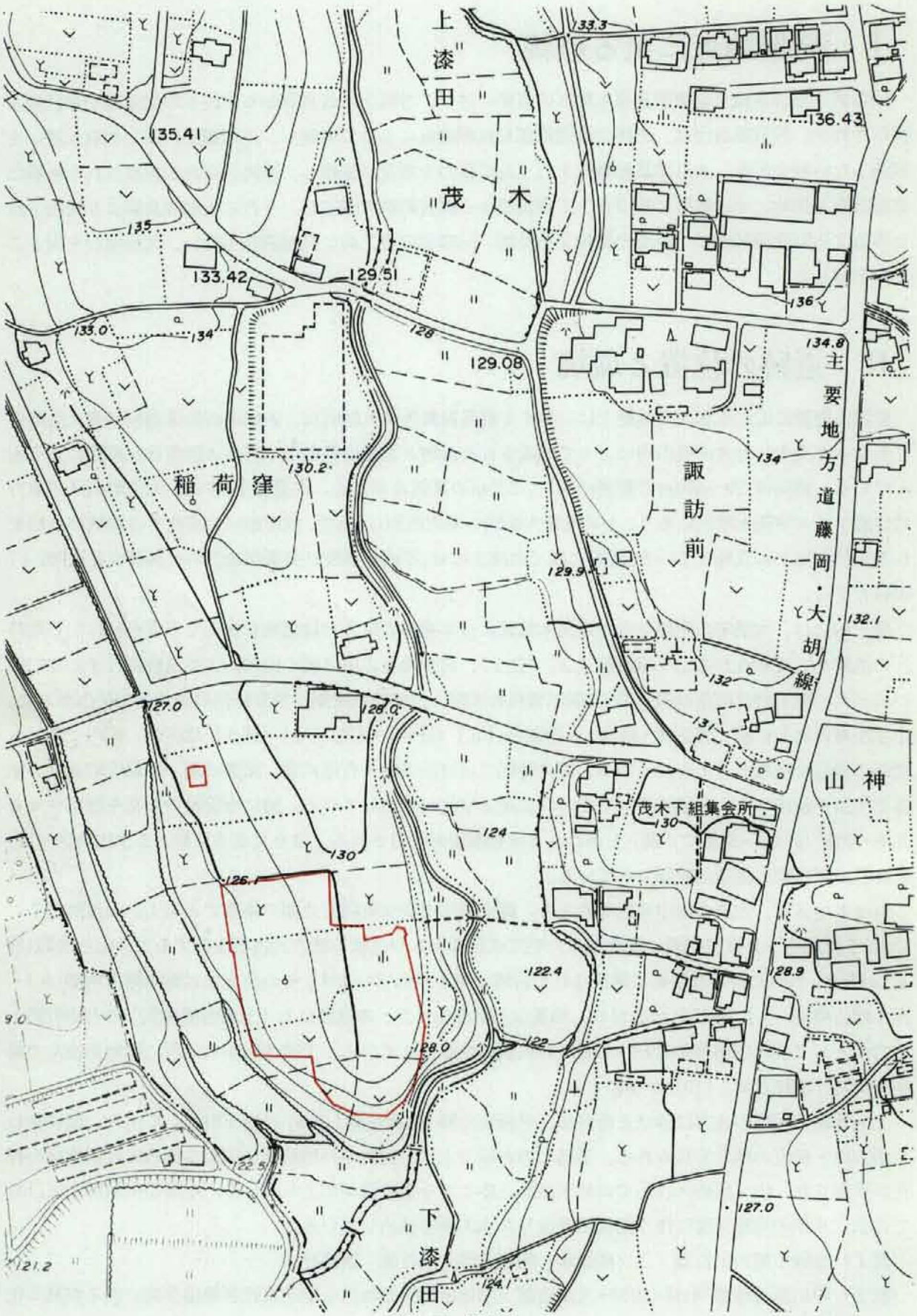
歴史的には、大胡町の南部を占める茂木地区には本遺跡の東方には低地を挟んで小字小林に旧石器時代の遺跡として知られる三ッ屋遺跡〔３〕（註１）、同台地上の南に続く山神・大畑遺跡群〔４〕（註２）が広がり、縄文時代前期諸磯式期・中期加曽利Ｅ式期、古墳時代後期～平安時代の集落等が検出された。小字小林の北方に続く諏訪東・経塚・天神風呂〔５〕（註３）・天神〔６〕（註４）地区は、町内でも最も遺跡の濃密な地域と考えられている。縄文時代では前期黒浜・有尾式期、諸磯式期、中期焼町式期の集落や土器が検出され、古墳時代～平安時代に至る集落が分布している。特に寺院跡の存在を推察させる瓦塔・浄瓶（註５）・朱墨で「磯」と書かれる灰釉陶器が注目される。さらに北方に続く五十山地区〔11〕には石田川式期の集落が確認されている。

当茂木地区は、古墳の集中地区でもある。縄文時代中期加曽利Ｅ式期の集落である上ノ山遺跡〔７〕には、５世紀末～６世紀初頭に構築された竪穴式石槨をもつ古墳や横穴式古墳を有する上ノ山古墳群(註６)があり、当町に於いて最初に構築された古墳と考えられています。その北方には東小路古墳群〔８〕・西小路古墳群〔９〕（註７）が広がり、20基以上が存在した。本遺跡にも「上毛古墳綜覧」の大胡町第１号古墳として茂木字稲荷窪839・840番地の円墳が登録されている。天神地区から北西に低地を挟んで県指定史跡「堀越古墳」〔10〕が存在する。

上毛電鉄大胡駅の北方に伸びる街区は、県指定史跡「大胡城跡」〔15〕の城下町として栄え、城に拘わる根古屋・殿町の地名も見られる。荒砥川の右岸で上ノ山遺跡の台地前面に広がる低地には居館址の存在が推察され、山ノ前地区〔14〕では北宋銭を主体とする備蓄銭が出土している。左岸の中宮関地区〔13〕では弘仁９年の地震災害に伴う泥流で埋没した水田跡を検出している。

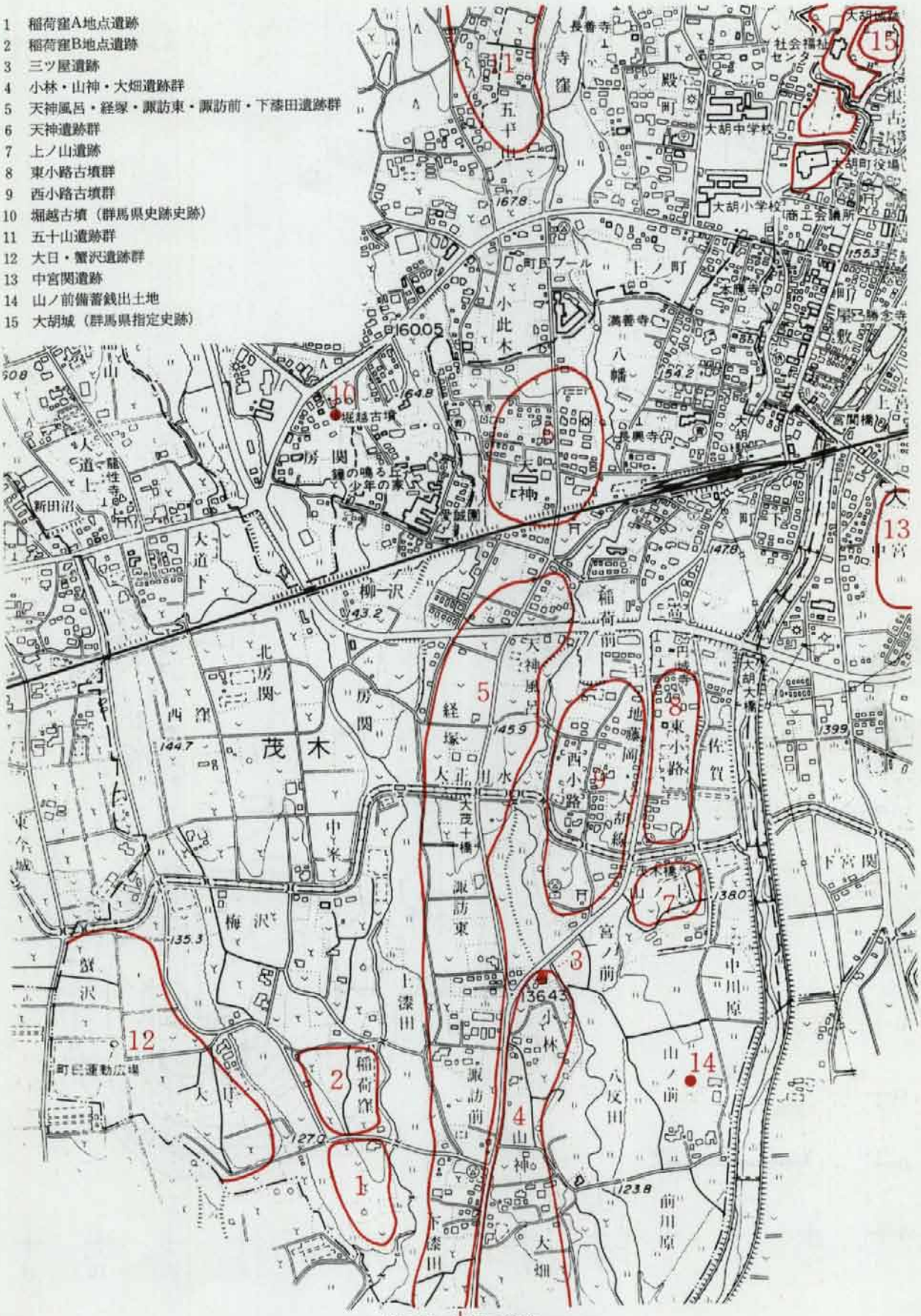
（註１）赤城山麓の旧石器「三ツ屋遺跡」相沢忠洋・関谷晃　講談社

（註２）中川原遺跡群 小林・山神・大畑遺跡（団体営中川原地区土地改良総合整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II）　1992 大胡町教員委員会

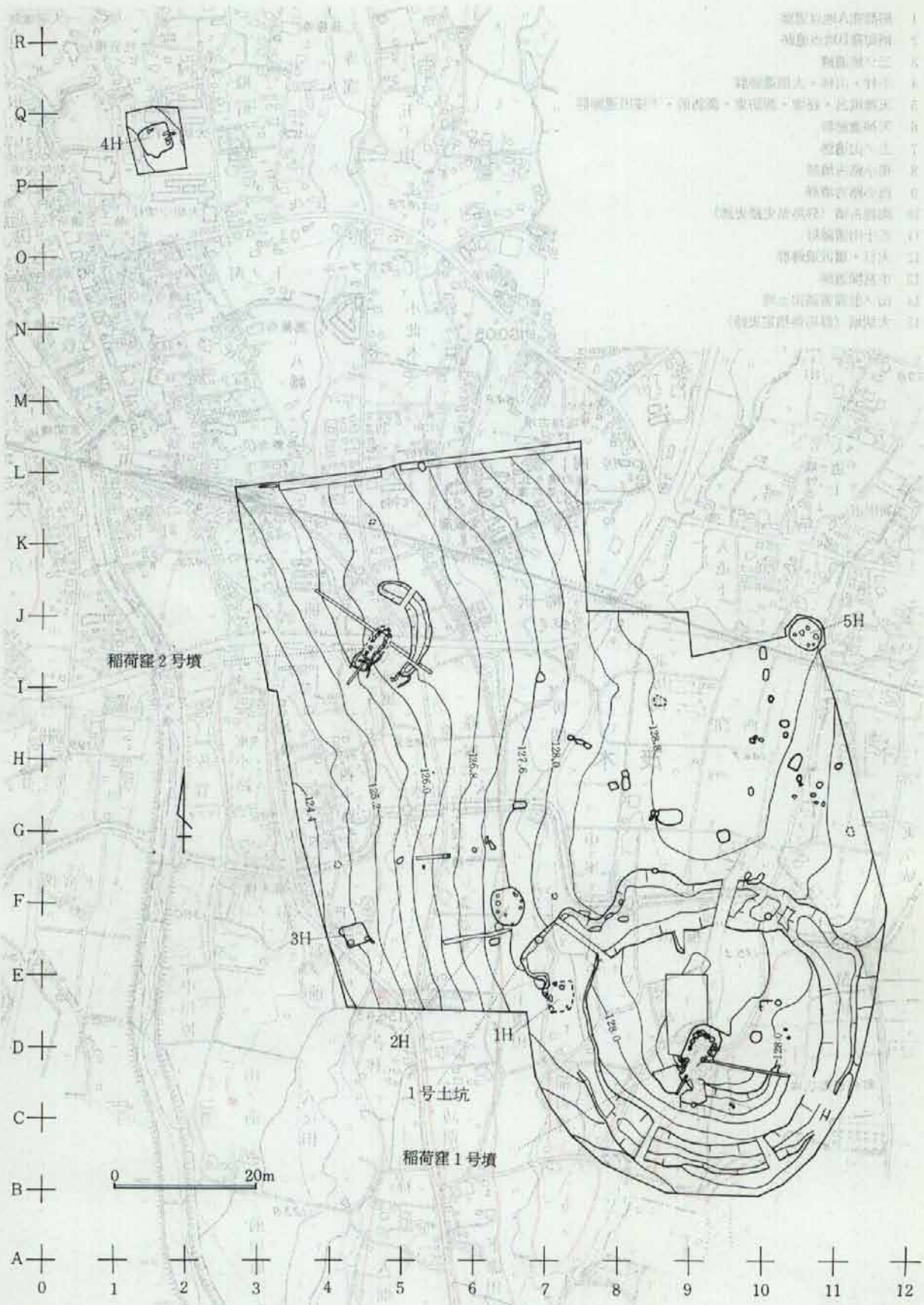

上漆田
茂木
稲荷窪
諏訪前
主要地方道藤岡・大胡線
山神
茂木下組集会所
下漆田
135.41
133.42
129.51
129.08
136.43
133.3
134.8
132.1
130.2
129.9
128.0
127.0
126.1
124
122.4
122
121.2

第1図　位置図

1　稲荷窪A地点遺跡
2　稲荷窪B地点遺跡
3　三ツ屋遺跡
4　小林・山神・大畑遺跡群
5　天神風呂・経塚・諏訪東・諏訪前・下榛田遺跡群
6　天神遺跡群
7　上ノ山遺跡
8　東小路古墳群
9　西小路古墳群
10　堀越古墳（群馬県史跡史跡）
11　五十山遺跡群
12　大日・蟹沢遺跡群
13　中宮関遺跡
14　山ノ前備蓄銭出土地
15　大胡城（群馬県指定史跡）



第2図　周辺の遺跡



第３図　稲荷窪Ａ地点遺跡全体図

（註３）天神風呂遺跡　主要地方道、前橋・大間々桐生線〈仮称大胡バイパス〉建設にの事前埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 1981 大胡町教員委員会

（註４）天神遺跡　群馬県史 資料編１ 原始古代１ 旧石器・縄文

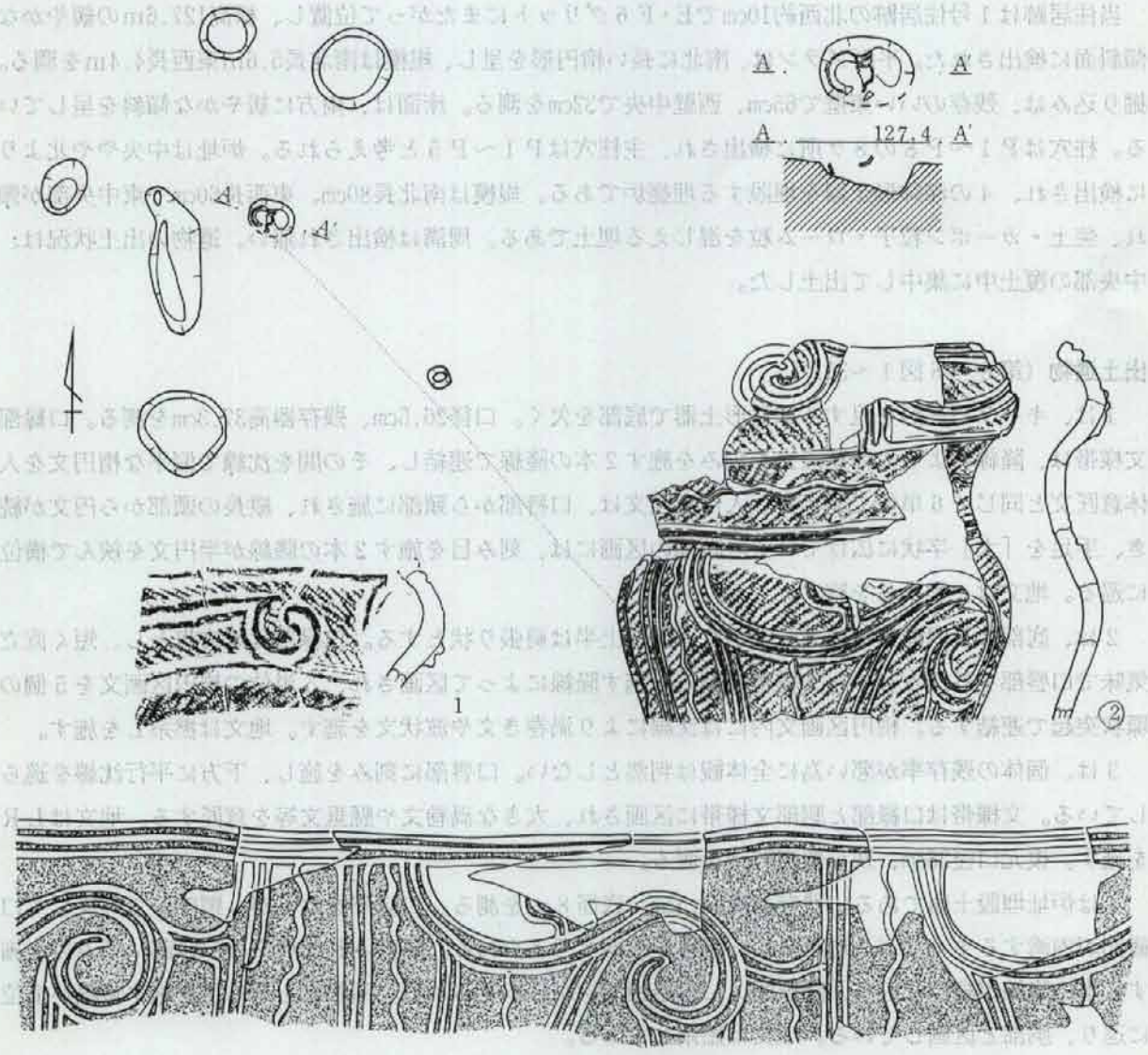
（註５）まんが大胡町誌　資料編　第二章 原始古代　1995 大胡町

（註６）中川原遺跡群 上ノ山遺跡(団体営中川原地区土地改良総合整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ）　1992 大胡町教員委員会

（註７）西小路遺跡（ゴルフ練習場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告）　1994　大胡町教員委員会

Ⅲ　検出された遺構と遺物

本遺跡では、縄文時代中期中葉～後葉に至る住居跡と土坑、大胡町１号墳（稲荷窪１号墳）と記載漏れ（稲荷窪２号墳）の円墳２基、古墳時代後期の竪穴式住居跡１軒と奈良時代の竪穴式住居跡１軒の遺構が検出された。



第４図　１号住居跡・出土遺物

1号住居跡（第4図）

当住居跡は調査区の南方に構築された稲荷窪1号古墳の西側D7グリットに位置し、1号墳の周堀が方形状に張り出す部分に検出された。平面プラン・規模は周堀の開削により明確では無い。炉址は埋設土器を伴う埋甕炉である。埋甕炉は、40cm×30cmの楕円形の掘り込みに深鉢形土器2を埋設している。柱穴・土坑状の掘り込みが炉址を環状に囲む様に検出された。周溝は検出されなかった。

出土遺物（第4図1．2）

1と2は同一個体と考えられ、炉址の埋設土器。最大径を胴部上半とする下膨れのキャリパー形を呈する深鉢で、口縁部の一部と胴部下半を欠く。口縁部文様帯は、隆線により渦巻き文や区画文を施す。渦巻き文上には突起が付されるのであろう。頸部には沈線による緩やかな波状文が巡る。胴部文様帯は3本1組の横位沈線により区画され、下方には、渦巻き文を伴う曲線文と直線と波状の懸垂文を2単位で施す。地文は口縁部を横位、頸部と胴部を縦位のLRを施文している。大木8式系土器に類似する。

2号住居跡（第5図）

当住居跡は1号住居跡の北西約10cmでE・F6グリットにまたがって位置し、標高127.6mの緩やかな傾斜面に検出された。平面プランは、南北に長い楕円形を呈し、規模は南北長5.6m東西長4.4mを測る。掘り込みは、残存のいい東壁で65cm、西壁中央で32cmを測る。床面は、南方に緩やかな傾斜を呈している。柱穴はP1～P8の8ケ所に検出され、主柱穴はP1～P5と考えられる。炉址は中央やや北よりに検出され、4の深鉢形土器を埋設する埋甕炉である。規模は南北長80cm、東西長60cmで東中央部が頸れ、焼土・カーボン粒子・ローム粒を混じえる埋土である。周溝は検出され無い。遺物の出土状況は、中央部の覆土中に集中して出土した。

出土遺物（第6～8図1～31）

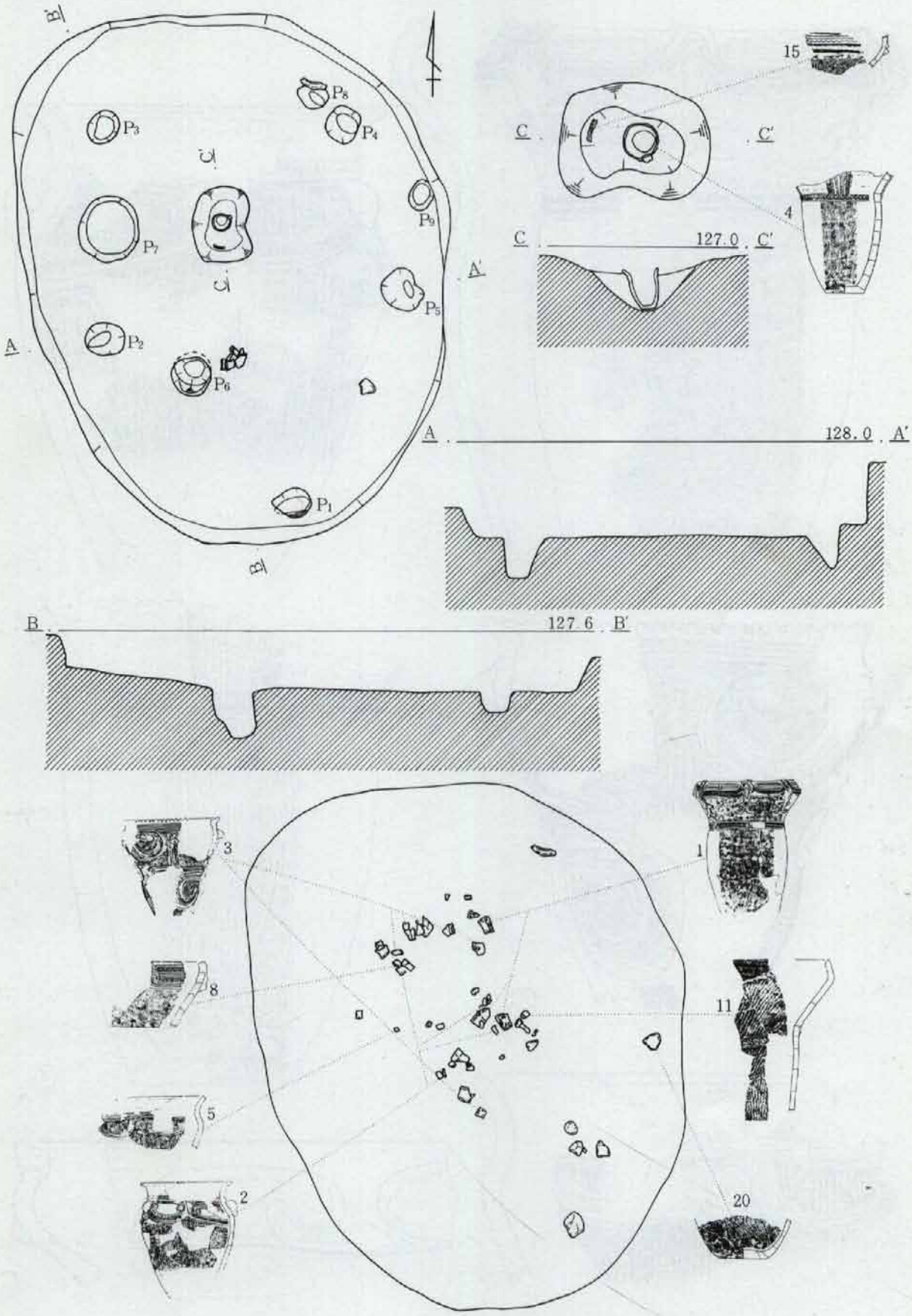
1は、キャリパー形を呈する深鉢形土器で底部を欠く。口径26.5cm、残存器高37.3cmを測る。口縁部文様帯は、隆線による人体意匠文を刻みを施す2本の隆線で連結し、その間を沈線で偏平な楕円文を人体意匠文と同じく6単位で配する。人体意匠文は、口唇部から頸部に施され、縦長の頭部から円文が続き、手足を「大」字状に広げている。胴部の区画には、刻み目を施す2本の隆線が半円文を挟んで横位に巡る。地文は、撚糸Rを施す。

2は、底部より内湾気味に立ち上がり、胴部上半は肩張り状とする。口縁部は無文帯とし、短く直立気味で口唇部を外反させる。文様帯は刻みを施す隆線によって区画され、5単位の楕円区画文を5個の環状突起で連結する。楕円区画文内には沈線により渦巻き文や波状文を施す。地文は撚糸Lを施す。

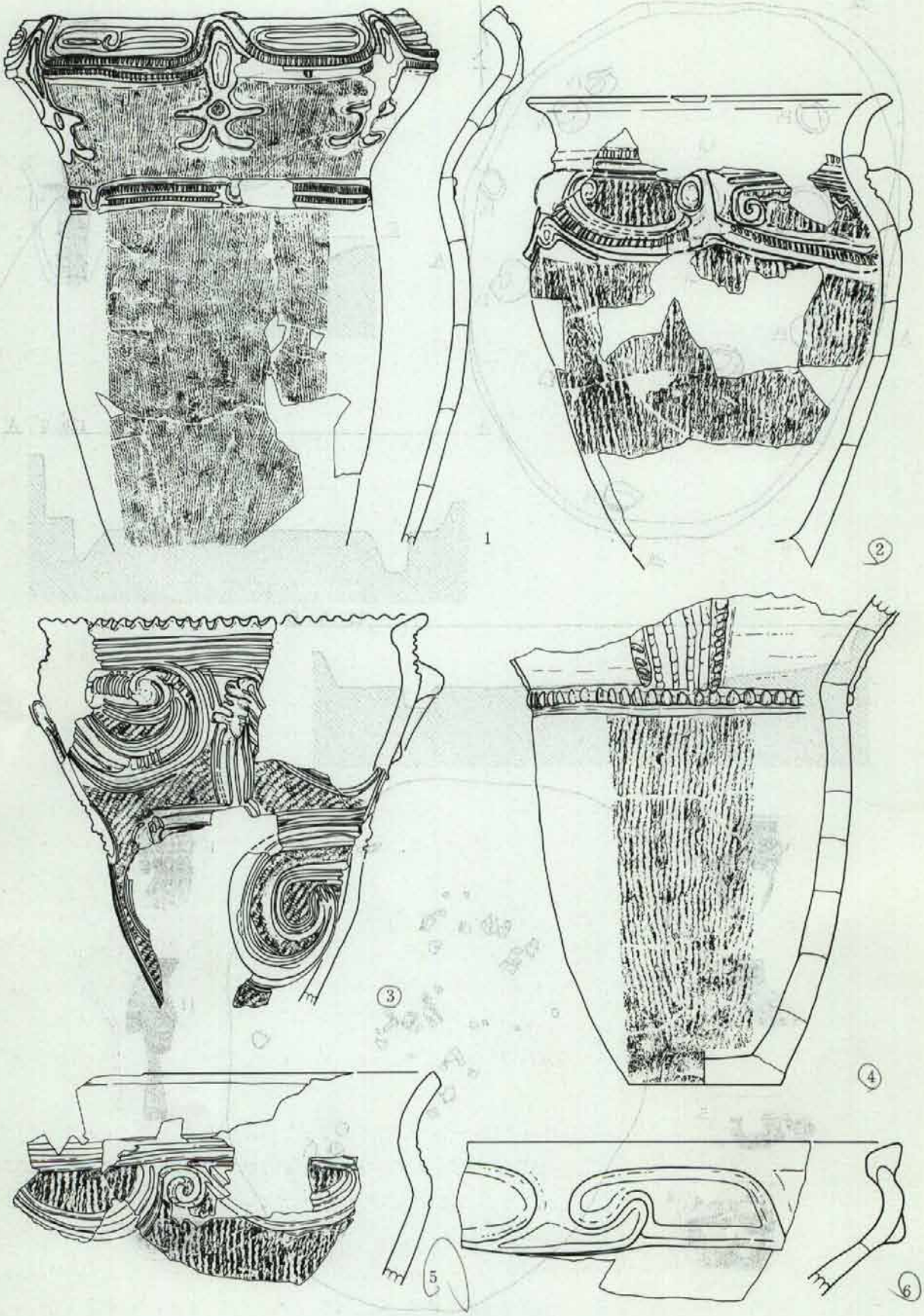
3は、個体の残存率が悪い為に全体観は判然としない。口唇部に刻みを施し、下方に平行沈線を巡らしている。文様帯は口縁部と胴部文様帯に区画され、大きな渦巻文や懸垂文等を意匠する。地文はLRを施す。復元口径26cm、残存器高27cmを測る。

4は炉址埋設土器である。残存器高24.5cm、底径8cmを測る。口縁部を欠くが、頸部から外反して口縁部が内湾するキャリパー形を呈する深鉢形土器と考えられる。研磨された無文の口縁部に刻み目を施す2本の隆線が縦位に巡り、隆線間。には結節沈線が3本見られる。頸部にも刻み目を施す隆線が横位に巡り、胴部と区画している。地文は撚糸Lである。

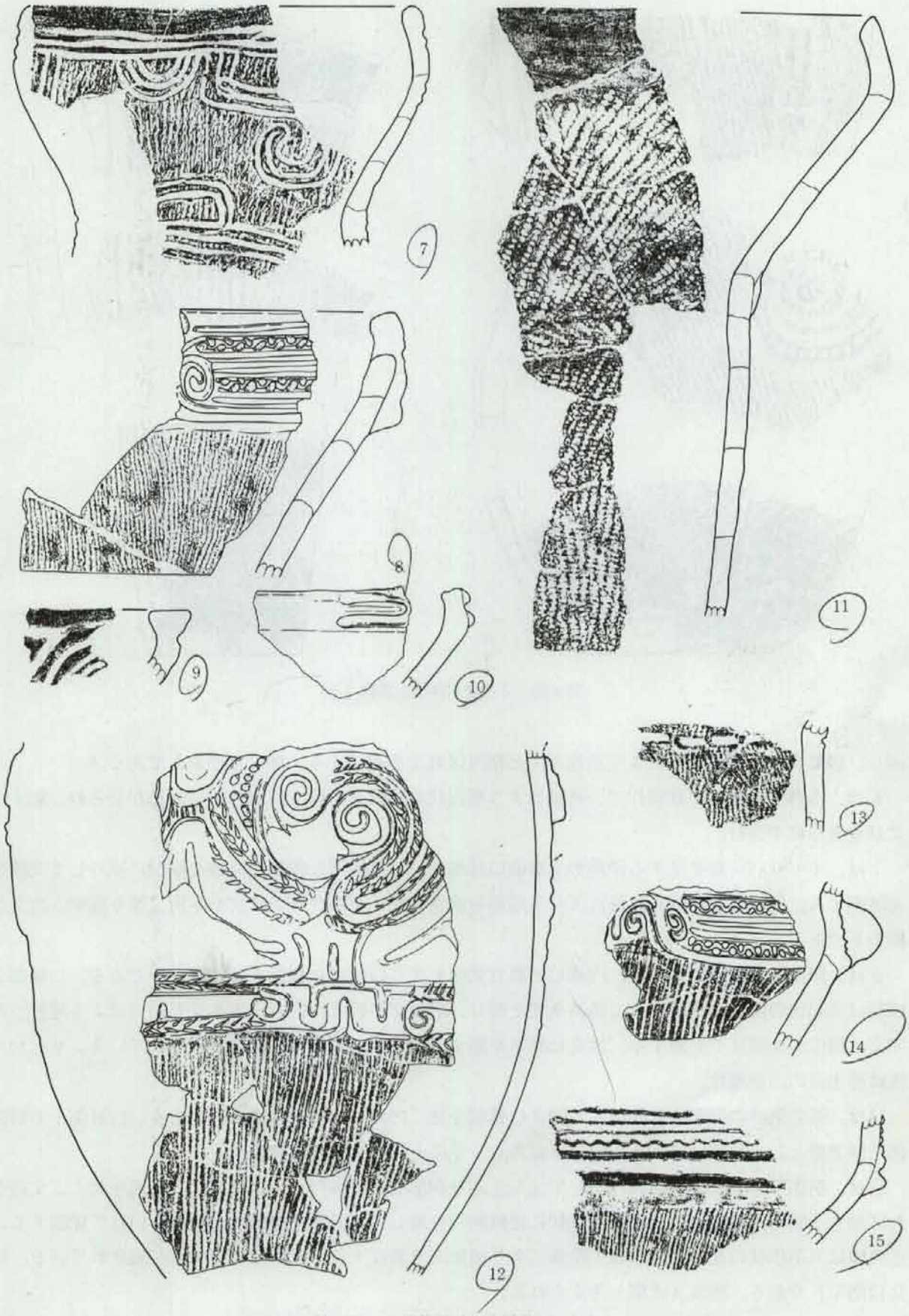
5は、「く」の字状に屈曲する口縁部片で、口縁部は無文帯とする。横位に巡る平行沈線で文様帯を区



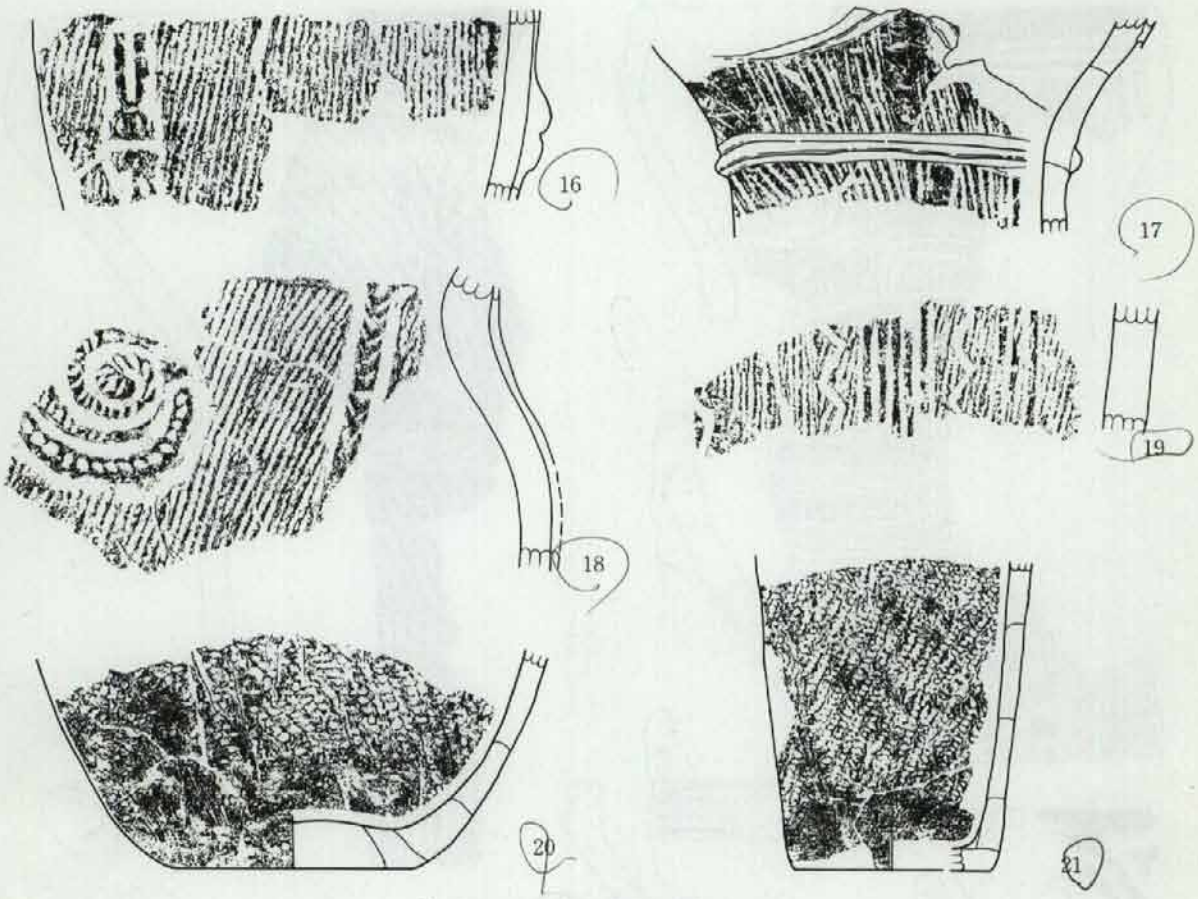
第5図　2号住居跡



第6図　2号住居跡出土遺物（1）



第７図　２号住居跡出土遺物（２）



第８図　２号住居跡出土遺物（３）

画し、胴部文様帯には沈線により渦巻き文と楕円区画文を連結する。地文は撚糸Ｌである。

６は、浅鉢形土器の口縁部片で、隆線により楕円状の意匠文を施す。部分的に朱塗が見られ、胎土中には金雲母粒を含む。

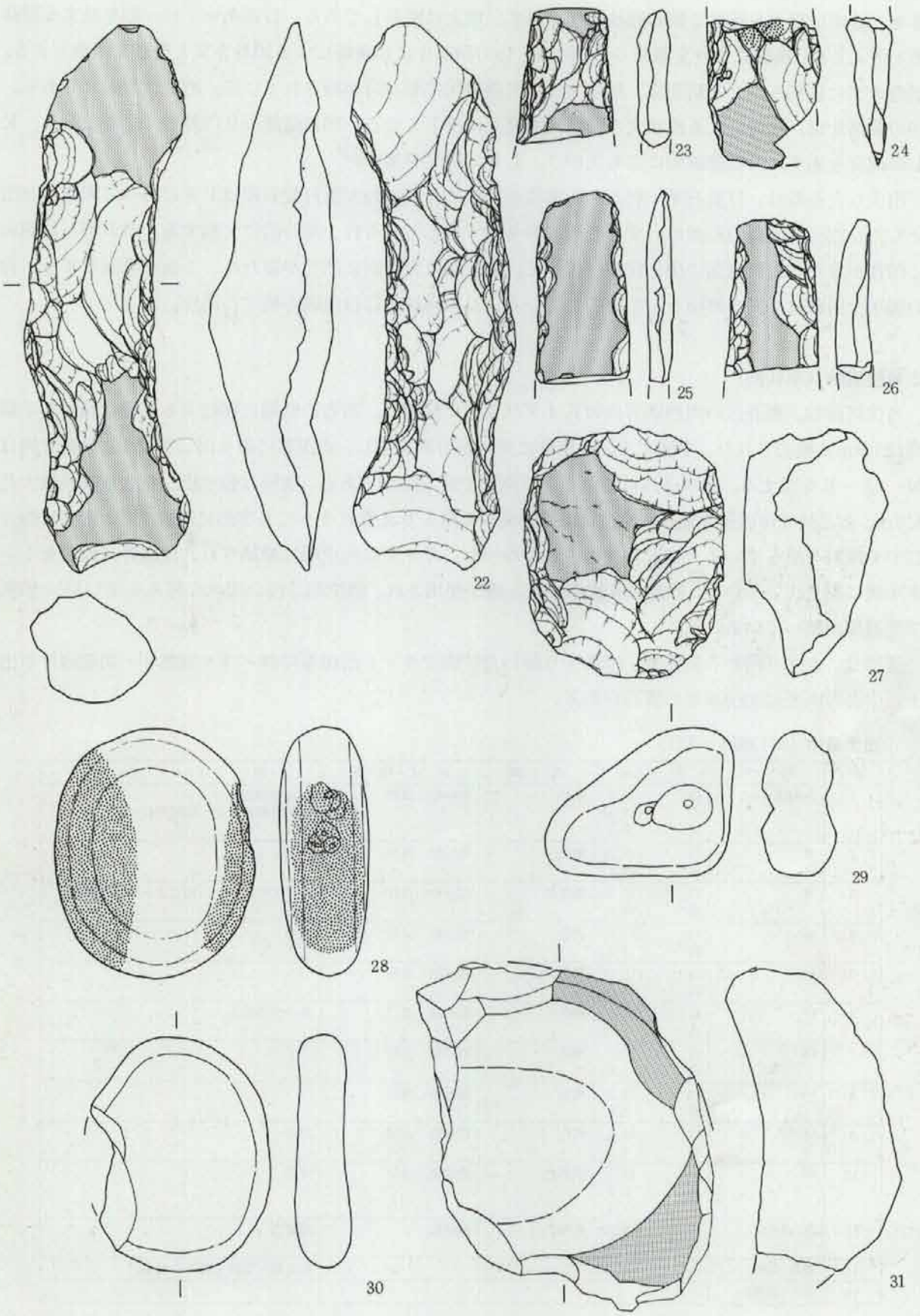
７は、キャリパー形を呈する深鉢形土器の口縁部片。口唇部下と頸部に沈線を横位に巡らして文様帯を区画する。口縁部文様帯も沈線により先端部を渦巻き状とするクランク文や半円文等を施す。地文は撚糸Ｌである。

８は、頸部より直線的に開き、内湾して直立気味とする口唇部に移行する口縁部片である。口縁部文様帯は突起状の側面に沈線による渦巻き文と施し、区画文が続く。区画文内を交互刺突による連続コの字文と横位の沈線文で充填する。地文は撚糸を施す。14と15も同様の文様帯が施されている。９と10は浅鉢形土器の口縁部片。

11は、直立気味の胴部より外反して開き口唇部を強く内湾させる深鉢形土器である。口唇部下の屈曲部を無文帯とし、頸部には太めの隆線を巡らし、その上に地文ＬＲを充填する。

12は、胴部下半より緩やかに内湾して立ち上がり胴部上半に移行する。口縁部と底部を欠く。文様帯を区画する幅広隆線の上下には矢羽根状に連続刺突を施し、厥手文や鋸歯状に刻みをいれて加飾する。主文様は矢羽根状の連続刺突を施す隆線により抽象文を意匠する。空白部に三叉文が施されている。地文は撚糸Ｌである。勝坂３式期と考えられる。

13の胴部片には、横位に短い沈線を連続させる。地文はである。16の胴部片には、２本の隆線を垂下



第9図　2号住居跡出土遺物（4）

させ、途中に刻みを施す2個の瘤状突起を付す。地文は撚糸Lである。17はキャリパー形を呈する深鉢形と考えられ、隆線により文様帯を区画する。18の胴部片には隆線による渦巻き文と懸垂文が垂下する。渦巻き文には刻み目文と刺突文、懸垂文には矢羽根状に刻み目が施されている。地文は撚糸Rである。19の胴部片は、沈線による波状文と懸垂文を交互に垂下させる。20は底部より内湾して立ち上がり、RLの縄文を施す。21は直線的に立ち上がり、LRの縄文を施す。

出土した石器は、打製石斧・磨石・石皿等が出土した。22の大型打製石斧はP8に沿って床面より出土した。23～26の打製石斧のいずれも短冊形を呈すると考えられ、部分的に欠損する。28の磨石は側面に凹孔が穿たれ、両側面に炭化物が付着している。29は表裏面に凹孔が穿たれ、1面を摩面とする。30の偏平な円礫は1面を摩面として使用している。31は周縁部に自然面を残す石皿片。

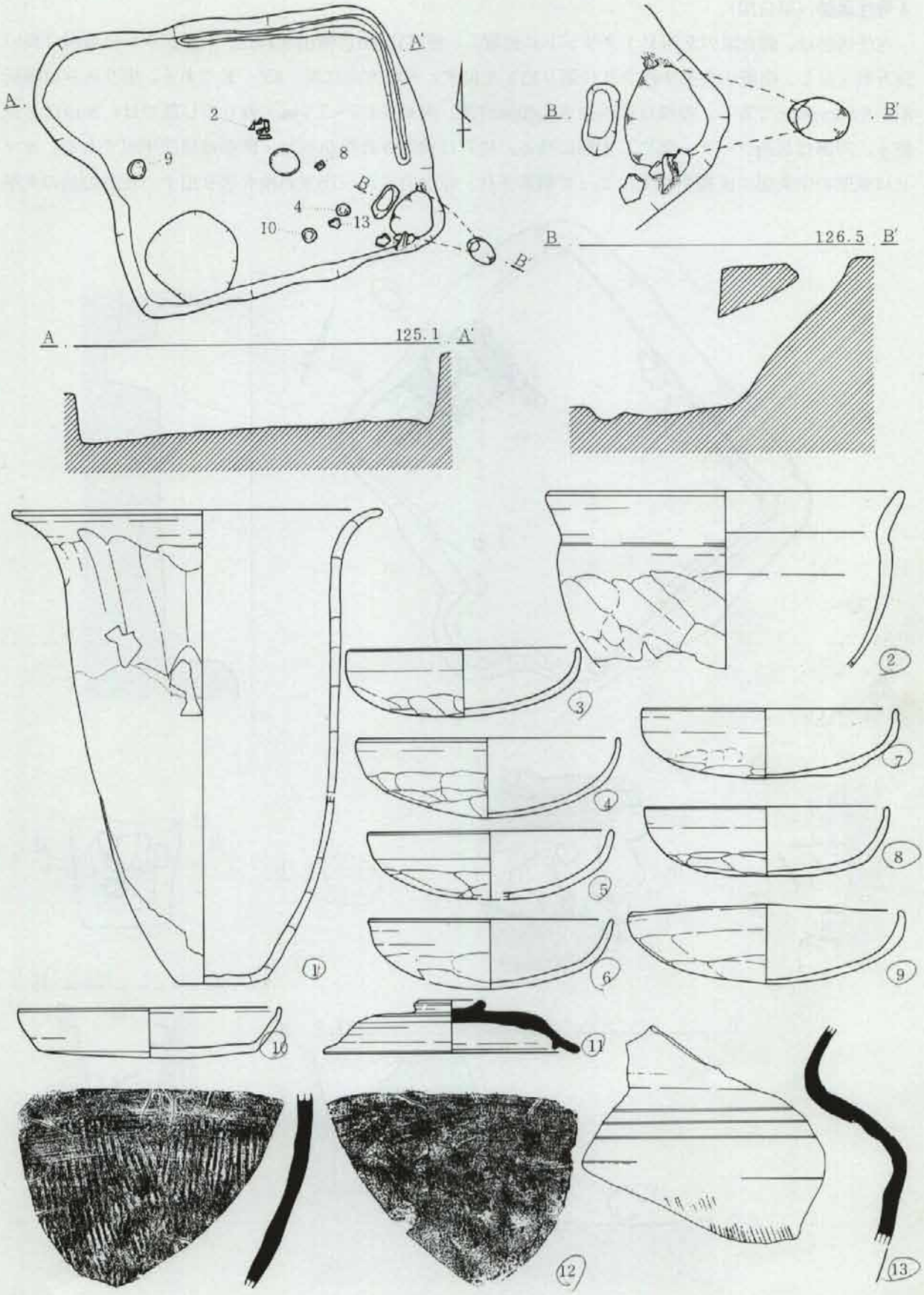
3号住居跡（第10図）

当住居跡は、調査区の南西隅方向のE4グリットに位置し、西方の低地に移行する緩慢な傾斜面で標高125.8mに検出された。平面プランは南北に長い長方形を呈し、北西部に張り出しを付す。長軸方向はN－72°－Eを呈する。掘り込みは確認面より南壁で最大65cmである。規模は張り出しを含む東西最大長3.8m、南北長3m前後を測る。周溝は東壁中央やや南より北壁にそってL字形に連続する。床面は西方にやや傾斜を呈している。柱穴は検出されなかった。カマドは南東隅に構築され、住居外に煙道をトンネル状に掘り抜いている。袖部は灰褐色粘土と礫が使用され、燃焼部は浅い皿状の窪みを呈し45°の傾斜で煙道部が続いている。

遺物は、カマド内から長胴甕、床面より浮いた状態でカマド前面等に鉢・坏・須恵坏・須恵壺片が出土。中央の床面に30cmほどの置石がある。

出土遺物（第10図1～13）

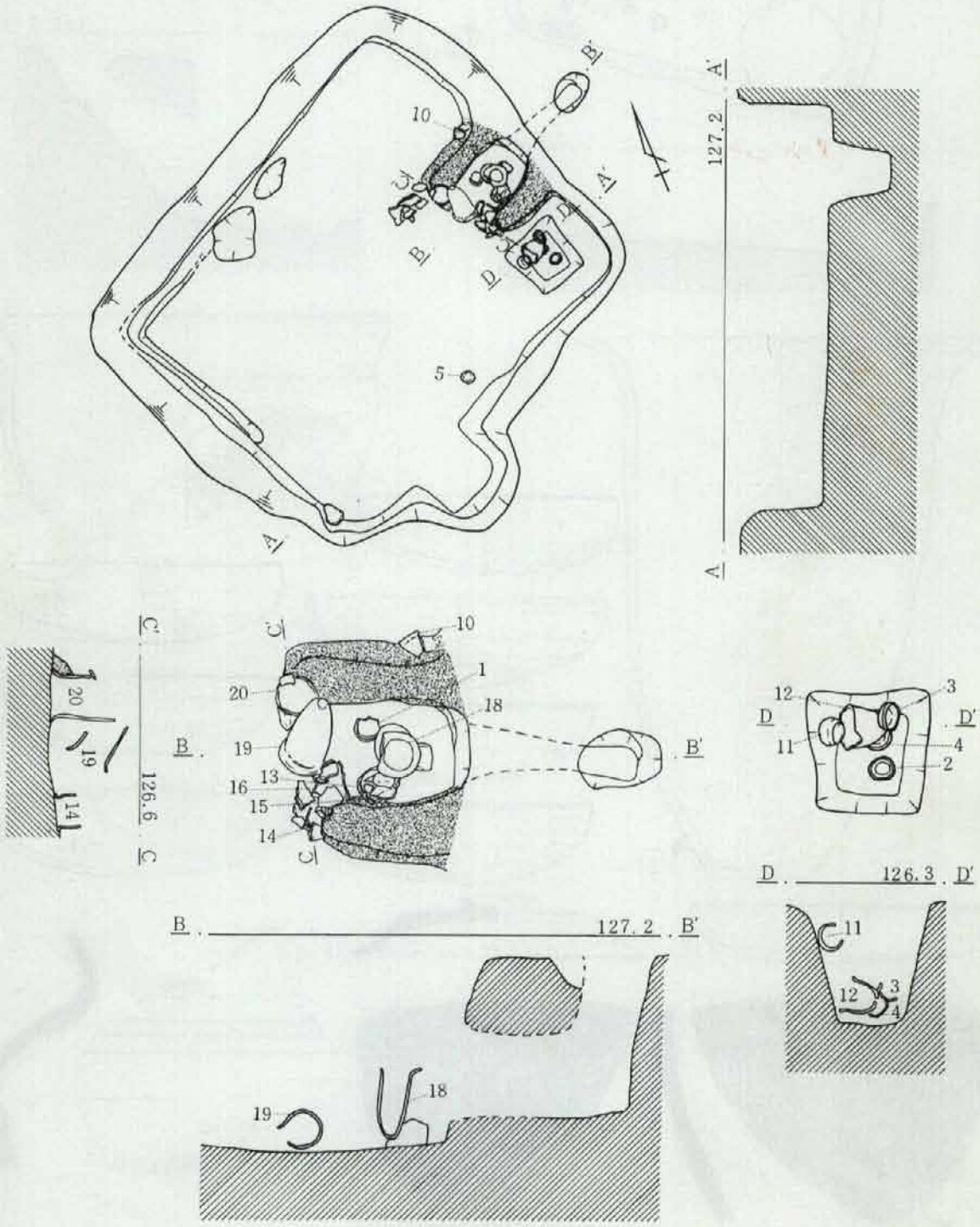
番号	器形	法量(cm)	色調	胎土・焼成	備考
1	長胴甕	口 25.8 高 (33.5) 底 6.3	褐色	粗砂粒 良好	カマド内出土 体部外面の中位～底部付近に粘土痕
2	鉢	口 (18.2) 高 〔9.4〕	褐色	粗砂粒 良好	
3	坏	口 (12.1) 高 3.6	淡褐色	粗砂粒 良好	カマド内出土 内面にタール状付着物
4	坏	口 13.7 高 4.3	褐色	粗砂粒 良好	完形
5	坏	口 (12.9) 高 (3.6)	褐色	粗砂粒 良好	
6	坏	口 12.6 高 3.7	褐色	粗砂粒 良	カマド内出土
7	坏	口 13.2 高 3.6	褐色	粗砂粒 良好	
8	坏	口 12.7 高 3.6	褐色	粗砂粒 良好	
9	坏	口 14.1 高 4.2	褐色	粗砂粒 良好	完形
10	坏	口 13.7 高 2.6 底 11.3	淡褐色	粗砂粒 良好	完形
11	蓋(須恵)	口 (13.2) 高 2.8	灰褐色	微砂粒	還元
12	壺片(須恵)				13と同一個体と考えられる
13	壺片(須恵)				



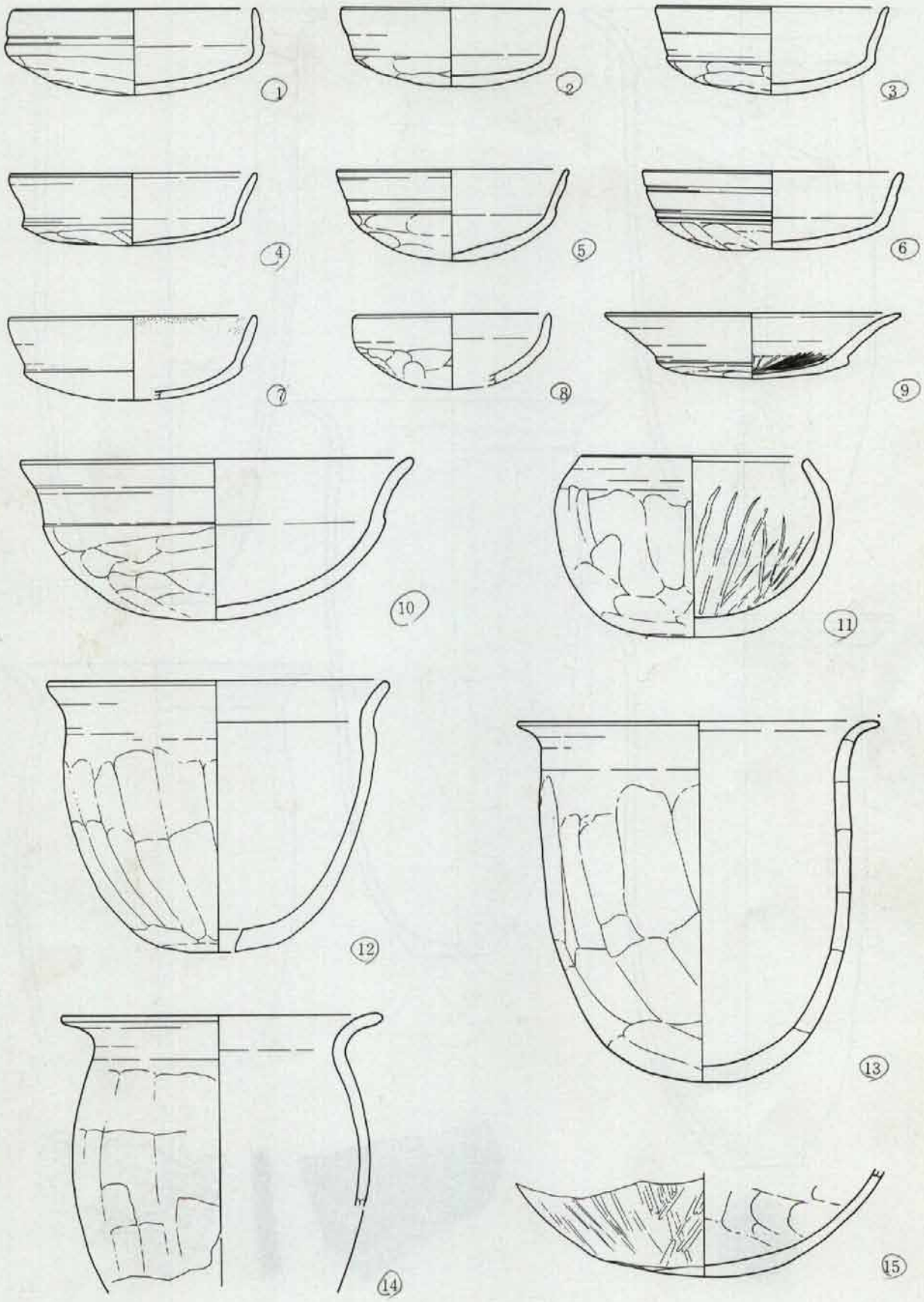
第10図　3号住居跡

4号住居跡（第11図）

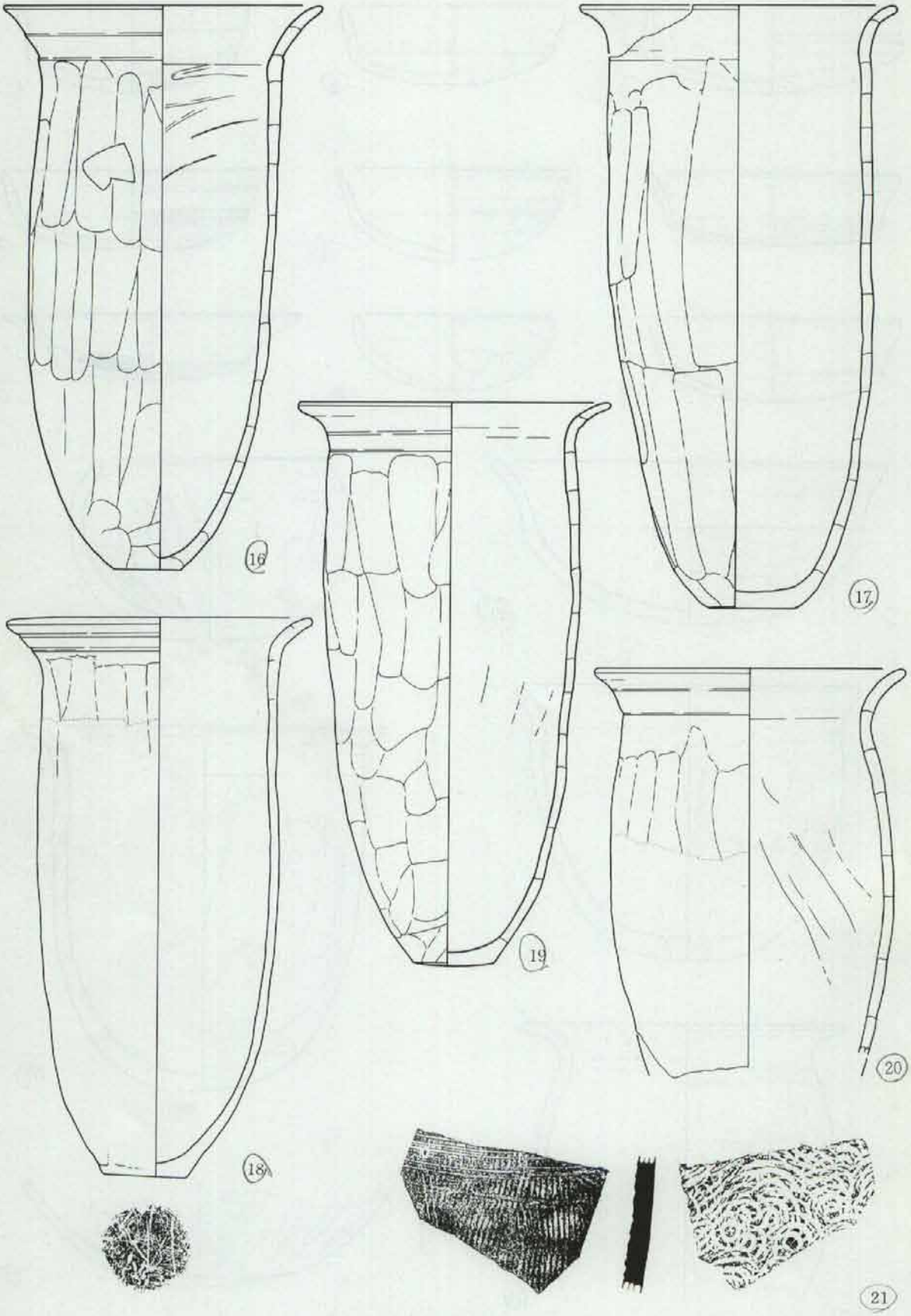
当住居跡は、調査区の北西Ｐ１グリットに位置し、標高127mに検出された。平面プランは東西に長い長方形を呈し、南壁中央やや西よりに張り出しを付す。主軸方向はN－65°－Eである。掘り込みは確認面より80～90cmである。規模は東西長さ4.40cm前後、南北長3.5～3.7m、張り出し部では4.20mほどを測る。周溝は北西コーナー部にＬ字形に残る。柱穴は検出されなかった。床面はほぼ平坦である。カマドは東壁の中央部に灰褐色粘土によって構築され、住居内に70～75cmの袖を張り出す。左右の袖の先端



第11図　4号住居跡



第12図　4号住居跡出土遺物（1）



第13図　4号住居跡出土遺物（2）

部には長胴甕を倒立させた状態で設置し、この間にも長胴甕を架構させて鳥井状の焚口部を作っていたと考えられる。焚口幅は35cmを測る。燃焼部の中央やや奥よりには自然石を設置し、カマド支脚としている。煙道は燃焼部より８cmほどの段差を設け、住居外に85cmの長さでトンネル状に掘り抜いている。貯蔵穴は南東隅に設けられ、上端で50×55cm、下端で40×30cmの方形プランを呈し、深さ55cmを測る。遺物はカマド内とその前面、貯蔵穴に集中して出土した。

出土遺物（第12・13図１～21）

番号	器　形	法　量(cm)	色　調	胎　土・焼　成	備　考
1	坏	口 12.4 高 4.5	褐色	粗砂粒　良好	ほぼ完形　カマド内出土
2	坏	口 11.3 高 4.1	淡橙色	粗砂粒　良好	完形　貯蔵穴出土
3	坏	口 11.8 高 4.6	黄橙色	微砂粒　良好	完形　貯蔵穴出土
4	坏	口 12.6 高 3.3	黄橙色	微砂粒　良好	完形　貯蔵穴出土
5	坏	口 11.8 高 4.8	淡黄褐色	微砂粒　良好	完形
6	坏	口 (13.2) 高 4.1	褐色	粗砂粒　良好	カマド内出土
7	坏	口 (12.8) 高 4.3	淡褐色	粗砂粒　良好	内面黒色処理
8	坏	口 (10.1) 高 (3.9)	褐色	粗砂粒　良好　貯蔵穴出土	
9	坏	口 (15.1) 高 3.4	褐色	粗砂粒　良好	内面に放射状暗文　カマド内出土
10	坏	口 20.1 高 8.3	淡黒褐色	粗砂粒　良好	カマド左袖部脇出土
11	鉢	口 11.6 高 9.4	淡黄褐色	粗砂粒　良好	完形　内面に放射状磨き　貯蔵穴出土
12	甑	口 17.8 高 14.2 底 6.1	黄褐色	粗砂粒　良好	完形　貯蔵穴出土
13	小型甕	口 18.5 高 18.9	褐色	粗砂粒　良好	ほぼ完形　カマド内出土
14	小型甕	口 16.4 高 〔14.6〕	黄褐色	粗砂粒　良好	カマド右袖部に使用
15	底部片				13の小型甕の蓋の使用
16	長胴甕	口 21.8 高 39 底 4.8	褐色	粗砂粒　良	ほぼ完形　カマドの焚口部天井に使用
17	長胴甕	口 21.5 高 41.4 底 5.6	褐色	粗砂粒　良好	ほぼ完形
18	長胴甕	口 20.6 高 38.6 底 5.6	褐色	粗砂粒　良	ほぼ完形　底部に木葉痕　カマドに据えられた
19	長胴甕	口 21.3 高 38.9 底 5.6	褐色	粗砂粒　良好	完形　カマドの焚口部天井に使用
20	長胴甕	口 21 高 〔28.1〕	褐色	粗砂粒　良好	カマド左袖部に使用
21	甕片(須恵)				

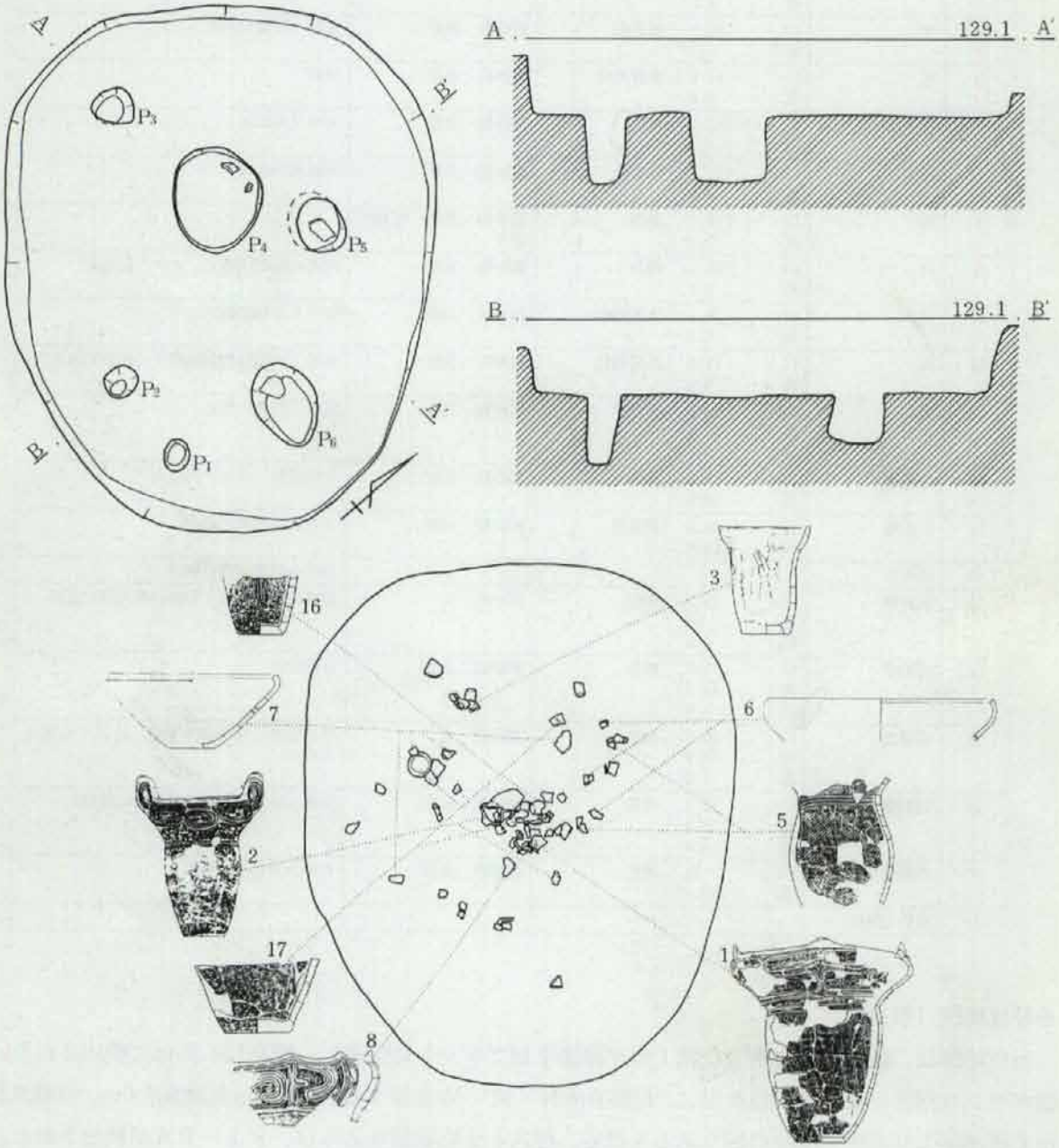
５号住居跡（第14図）

当住居跡は、調査区の北東で台地上の平坦部Ｉ10グリットに位置し、標高128.80mに検出された。平面プランは南北に長い楕円形を呈し、長軸方向N－52°－Wを呈する。規模は、長軸長4.6m、短軸長3.75mで確認面より北壁で50cmの掘り込みを測る。柱穴と土坑状掘り込みは、Ｐ１～Ｐ６が検出された。周溝と炉址は検出されない。遺物は中央部に集中する状態で出土している。

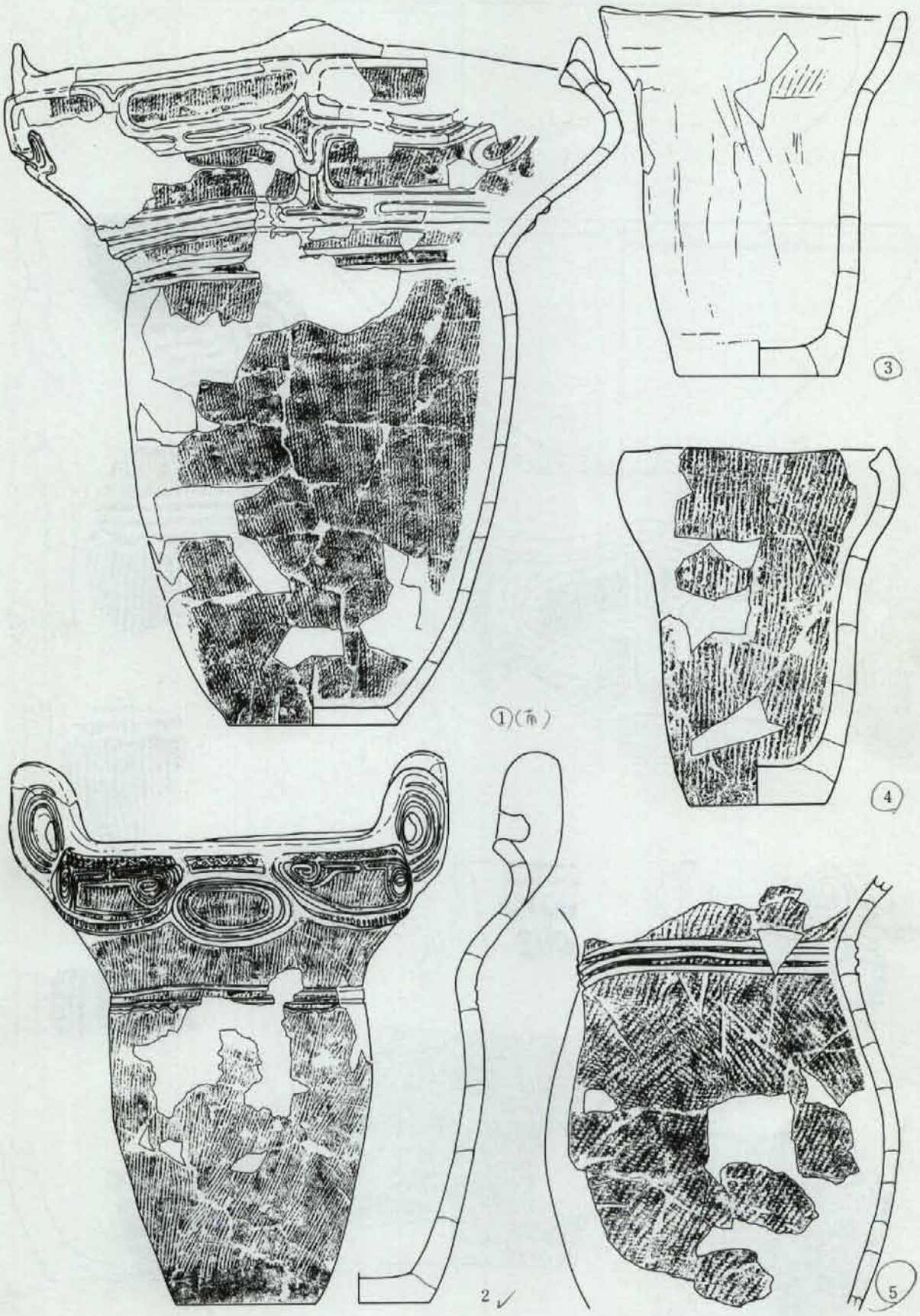
出土遺物（第15～17図１～26）

１は、４つの緩やかな山形突起を付すキャリパー形を呈する深鉢形土器である。復元器高48.1cm、口径38.5cm、底径11.5cmを測る。やや寸胴気味の胴部からやや屈曲する頸部に移行し、口縁部は「く」の字状に強く内湾する。口縁部文様帯は隆線と頸部に巡る２本の沈線により区画され、区画内に隆線で楕円区画文や渦巻き文等を施す。地文は撚糸Ｌを充填する。

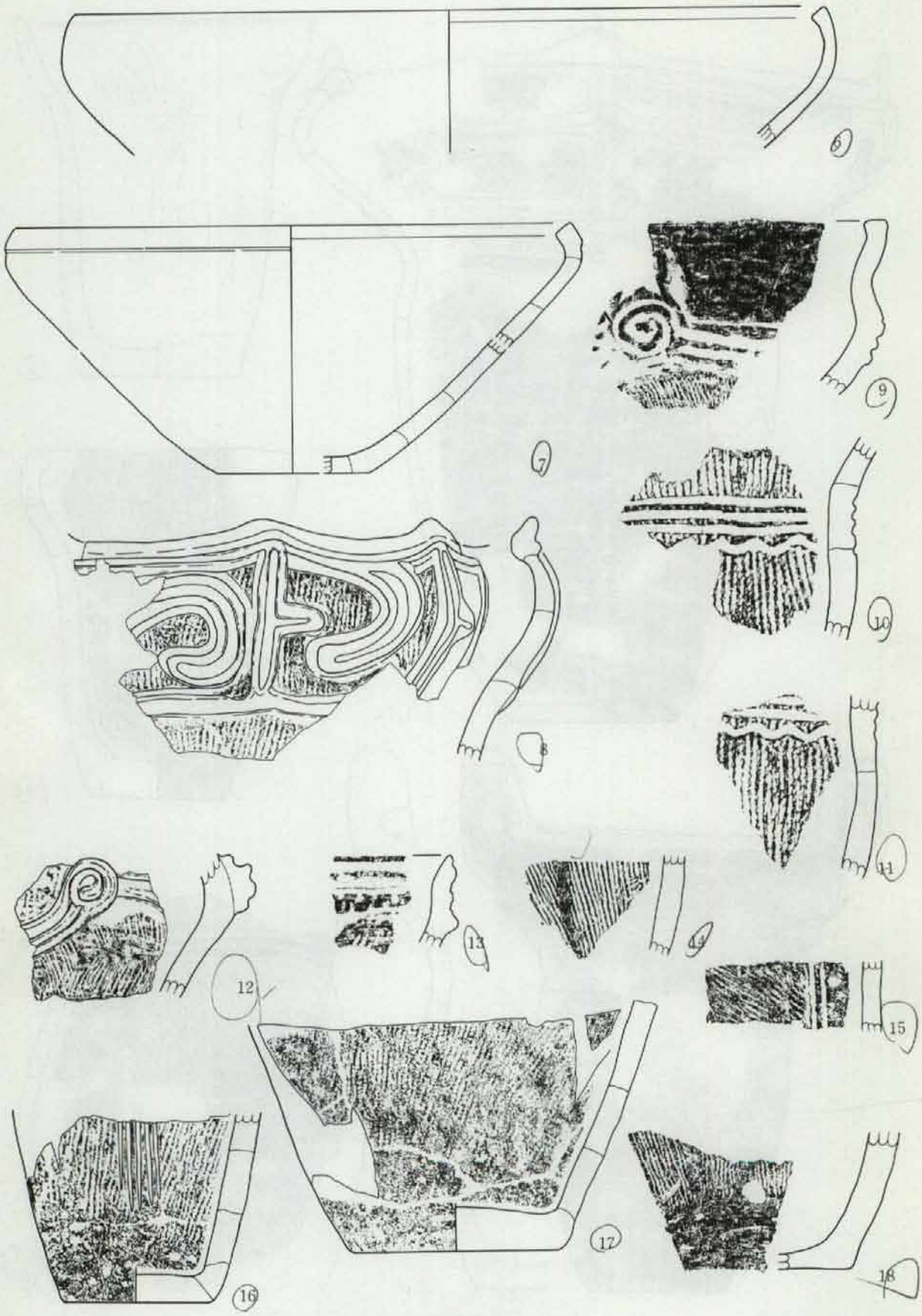
２は、２個の把手を付すキャリパー形を呈する深鉢形土器である。器高（把手を含む）38.2cm、口径22cm、底径9.5cmを測る。把手の頂部は大小の山形を呈し、眼鏡状に一対の通孔と内面からの孔の３個を有し、孔に沿って沈線が巡る。口縁部文様帯は、２単位で構成され、隆線により区画された３つの楕円区画文と把手が連結する。把手と中央の楕円区画文をつなぐ隆線には刻み目を施す。口唇部の無文帯直



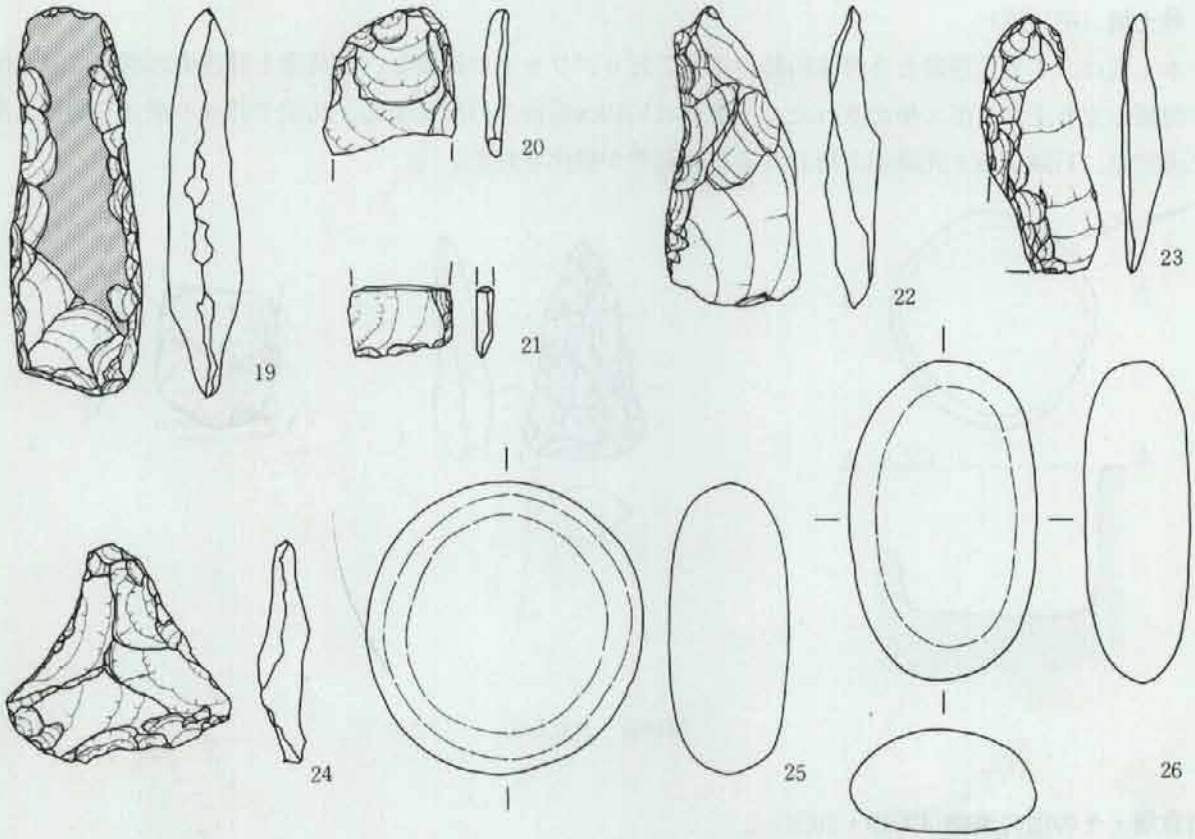
第14図　５号住居跡



第15図　5号住居跡出土遺物（1）



第16図　5号住居跡出土遺物（2）



第17図　5号住居跡出土遺物（3）

下には交互刺突による連続コの字文がある。楕円区画文内には沈線により渦巻き文等を施す。頸部には2本の沈線と波状文が巡る。地文は撚糸Rである。所謂「中峠式土器」と考えられる。

3は、直立気味に立つ胴部より緩やかに内湾して開く口縁部に移行する小形の深鉢形土器で無文である。口径15.3cm、器高18.8cm、底径8.1cmを測る。

4は、直立気味に立つ胴部より内湾する口縁部に移行する小形の深鉢形土器で撚糸Lを充塡する。口径13.3cm、器高18.5cm、底径7cmを測る。

5は胴部中央が張り出し、頸部でくの字状に屈曲する。頸部には3本の沈線が横位に巡る。地文はRLを充塡する。

6と7は、無文の浅鉢形土器である。7の口唇部下には1本の沈線が巡り、内面には僅かであるが朱塗が見られる。復元口径38.8cm、復元器高17.3cm、復元底径10.5cmを測る。

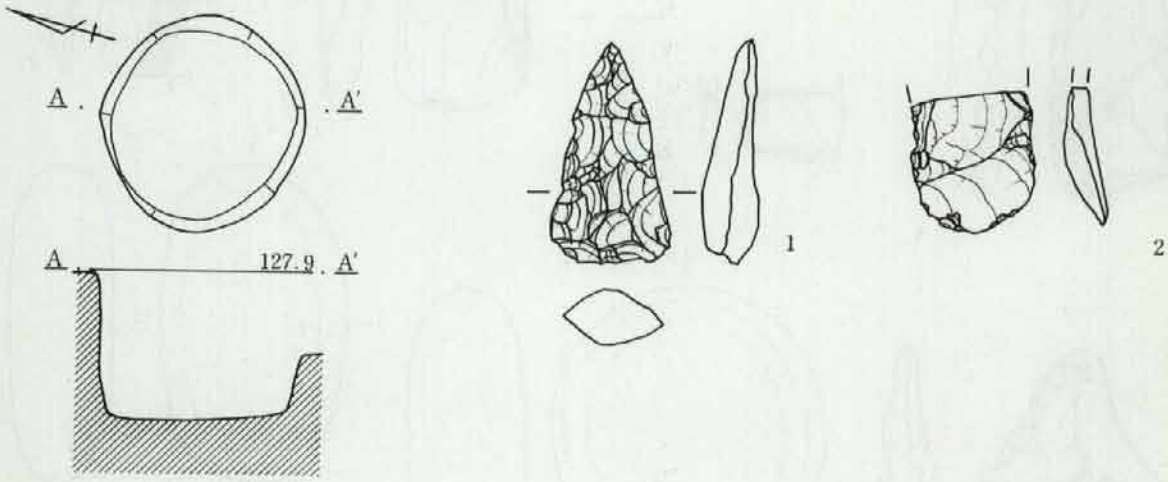
8は、キャリパー形を呈する深鉢形土器の口縁部片で緩やかな山形突起を付す。2本1組の隆線により区画内を「ト」や「つ」の字状の意匠文を施す。

9は、くの字状に屈曲する口縁部片で無文の口縁部下に隆線により渦巻き文等を施す。10と11は同一個体と考えられ、沈線と波状文を横位に巡らす。12は、隆線による渦巻き文を施す。13は、隆線による区画内を交互刺突による連続コの字文を施す口縁部片。14は撚糸文を施す胴部片。15は、平行沈線文を垂下させる胴部片。16～18は底部から胴部下半片で、16は5～6本の沈線文を垂下させる。地文は撚糸Rである。17はLRを充塡する。18の地文は撚糸文である。

石器は、打製石斧・スクレーパー・磨石が出土した。

1号土坑（第18図）

本土坑は、1号住居跡と2号住居跡の中間のＥ６グリットに位置し、稲荷窪1号古墳の西側に張り出す周堀の立ち上がり部に検出された。平面形は1.10cm前後の円形を呈し、北壁で75cmの深さを測る。出土遺物は、石鏃1点と先端部と思われる打製石斧が検出された。



第18図　1号土坑

包含層・その他の遺物（第19・20図）

1～3は早期に比定される。1は撚糸文系土器。2と3は押型文系土器で2は口唇部直下を横位、その下方に重複して縦位に施す。3は密に縦位に施す。4～6は早期末の縄文施文土器群と考えられる。胎土に繊維を含む。

7～10、12は前期諸磯ｂ式に比定される。7は波状口縁を呈し、口縁部が屈曲する。平行沈線を横位に施す。8は平行沈線による横位の区画文と矢羽根状文を施す胴部片。9は平行沈線に刻み、10は竹管による平行沈線内に刺突を加える。

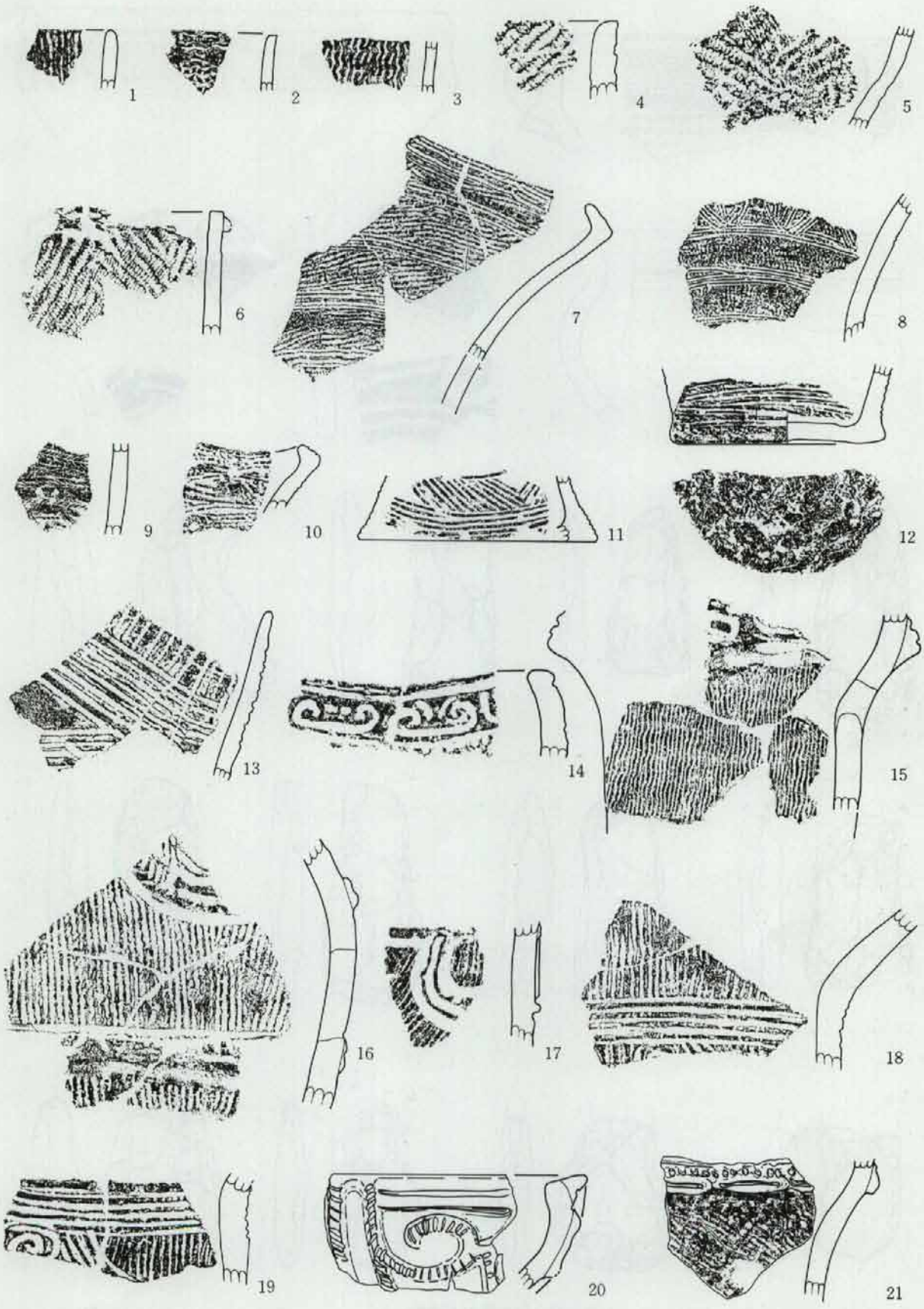
11は半隆起線により横位と鋸歯状に集合沈線を施し、鋸歯状文に三角の彫り込みを加える。前期十三菩提式に比定される。

13は波状口縁を呈する口縁部片で、胎土に繊維を含む。櫛歯状工具で口唇部直下に縦位に連続させ、その下方に菱形文を構成すると考えられる。前期有尾式に比定されよう。

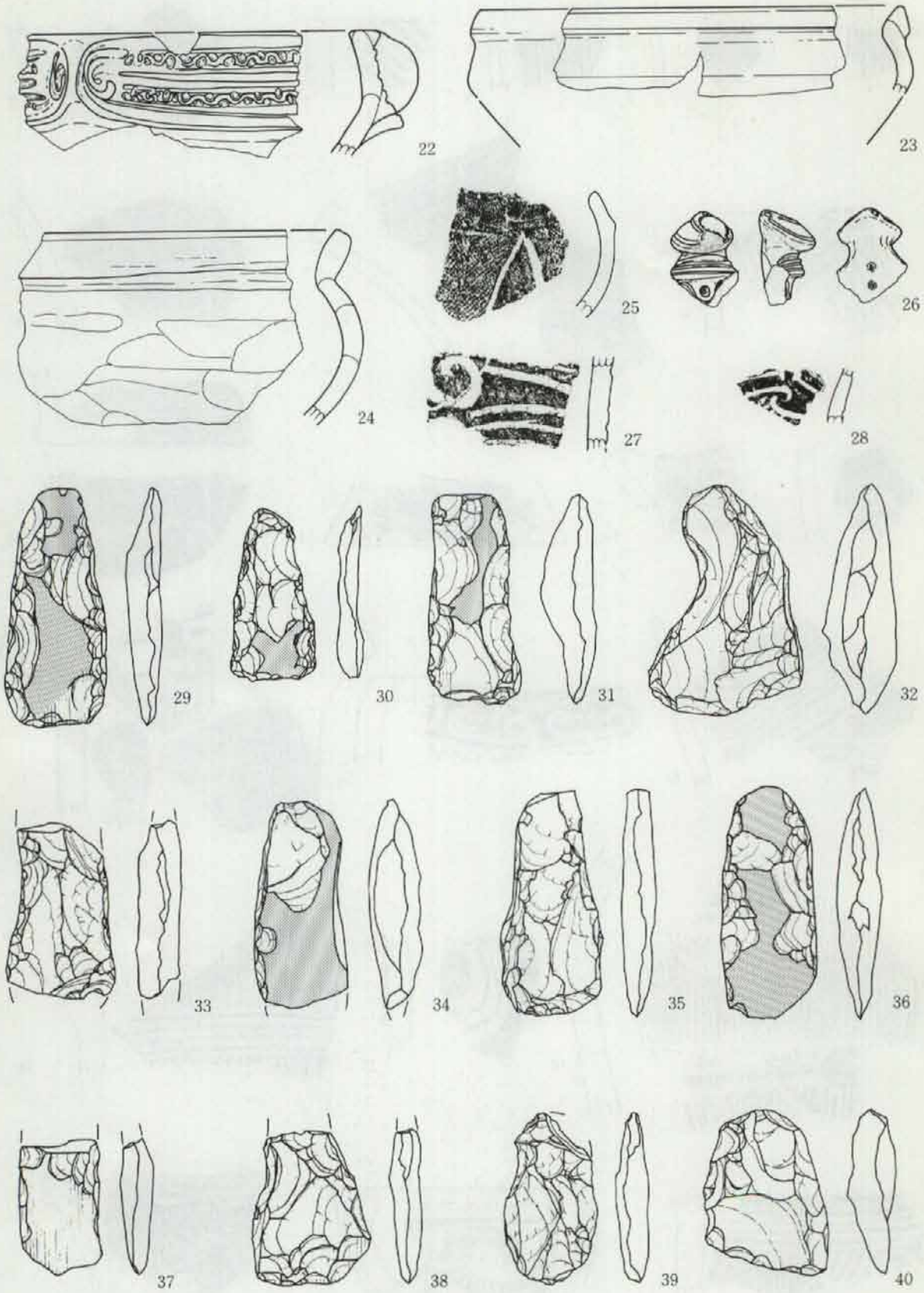
14～25は中期中葉～後葉に加曽利Ｅ式の所産と考えられる。14は沈線により両端を蕨手状とする意匠文を施す口縁部片。15は櫛歯状工具により条線を縦位に施す。16と20は隆線上に刻み目を施す勝坂式の要素を残す。16はＬの撚糸文を地文として充填し、矢羽根状の刻み等を施す隆線で文様を意匠する。17はＬの撚糸文を充填し、隆線により文様を意匠する。18と19は同一個体と考えられる。20は隆線に刻み目を施す口縁部片。21は隆線による偏平な楕円形を横位に連続させ、その上部に沿って刺突文が連続する。22は突出した耳状の突起の左右に渦巻き文、区画文内に交互刺突等を施す。23と24は無文の浅鉢形土器の口縁部片。25は沈線による区画文内を磨消を施す加曽利Ｅ４式に比定される口縁部片。26～28は後期の所産と考え競れる。

26は27は沈線で渦巻文や横位文を施す。後期の所産と考えられる。28は沈線による入組文を施す。

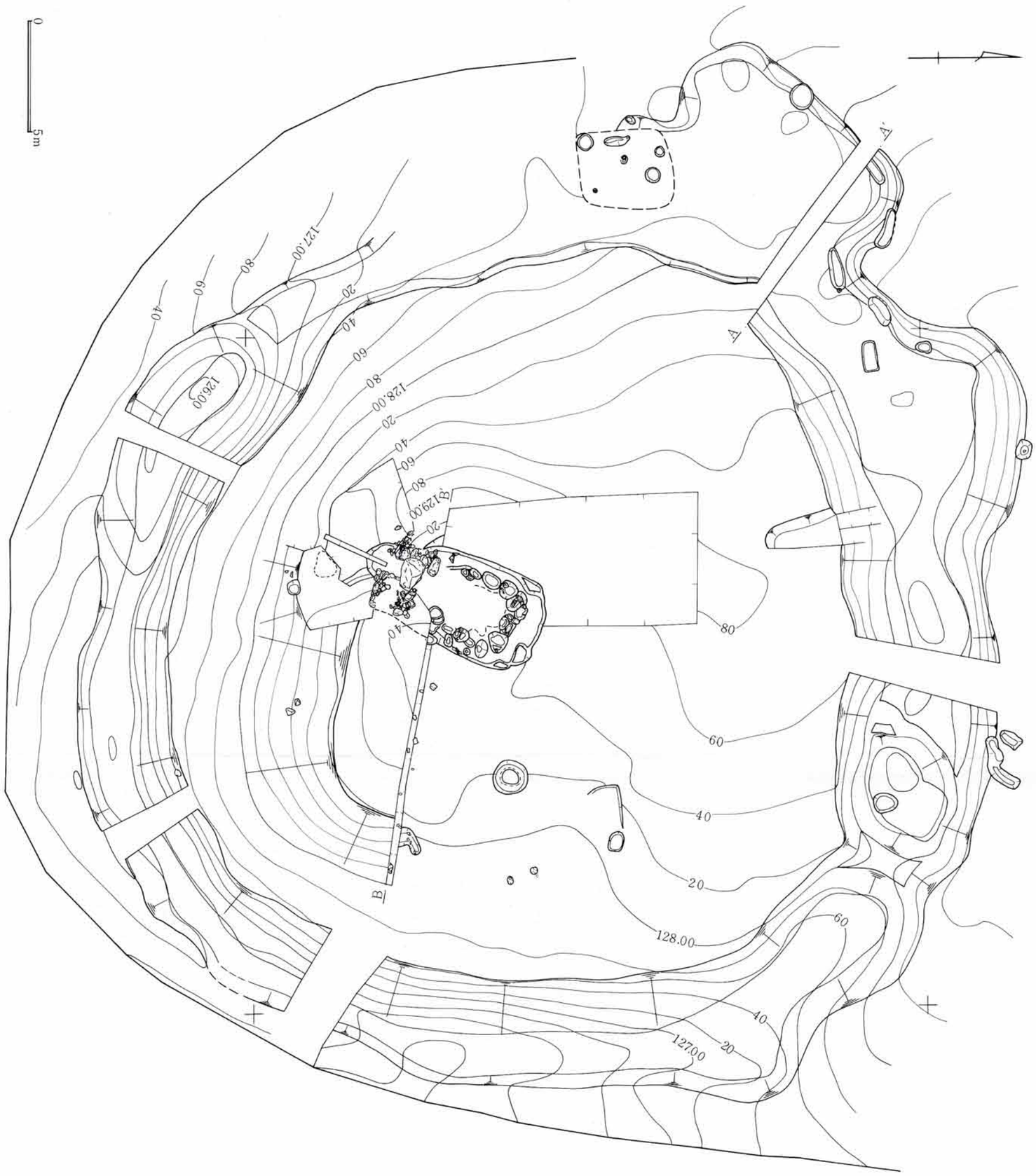
29～40は短冊形等を呈する打製石斧である。

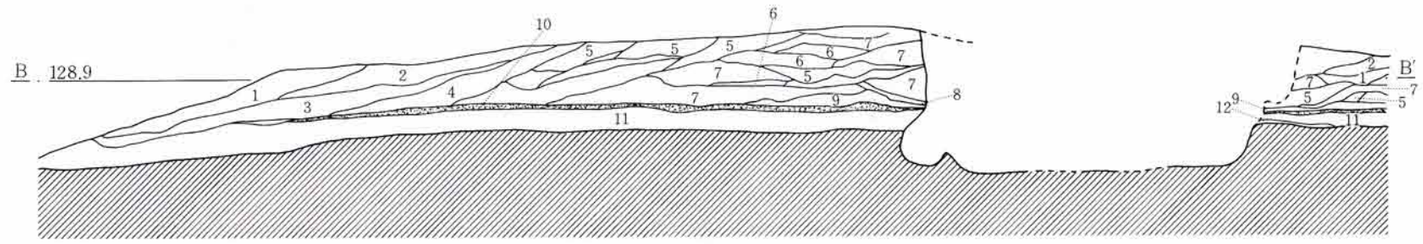


第19図　包含層出土遺物（1）



第20図　包含層出土遺物（2）



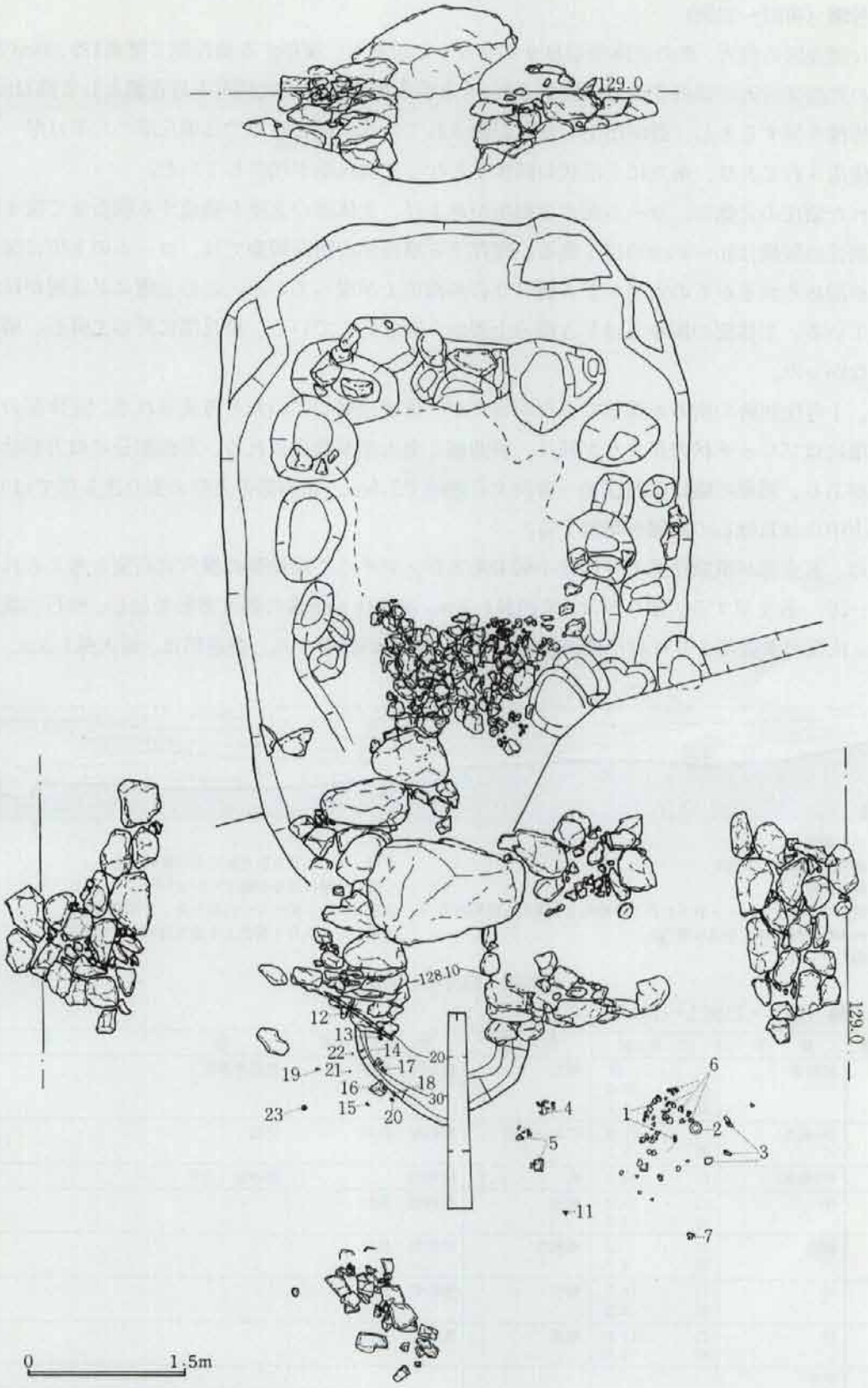


0　　2m

稲荷窪1号古墳墳丘土層

1層　黒褐色土
2層　ローム粒を含む暗褐色土
3層　ロームBとローム粒の混合土
4層　ローム粒とロームBを含む黒褐色土
5層　ロームBを含む暗褐色土
6層　ロームBを含む黒褐色土
7層　ロームB
8層　硬く締まったロームBと黒褐色土の混合土
9層　FAを混える黒褐色土
10層　FA
11層　ローム
12層　黒褐色土

第21図　稲荷窪1号古墳全体図



第22図　稲荷窪１号古墳主体部

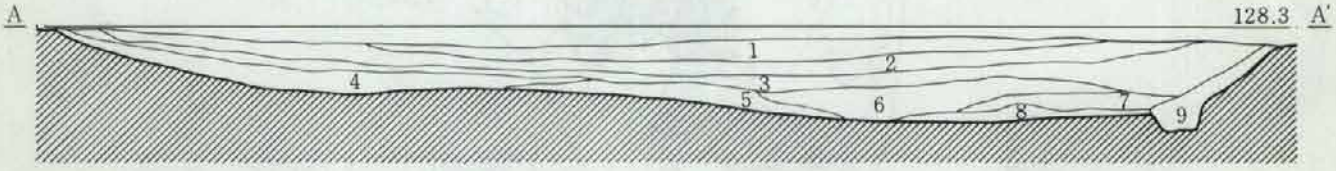
稲荷窪１号墳（第21～23図）

本古墳は調査区の南方、その主体部がＤ９グリットに位置し、残存する墳丘部で標高129.50cmである。舌状台地の先端部付近の傾斜変換点に構築され、「上毛古墳綜覧」に大胡町１号古墳として径119尺、高さ11尺の規模を呈するとし、壺が出土したと記載されている。調査時点では墳丘部の北側は削平され桑畑として使用されており、南方に土塁状の高まりとなって墳丘部が残存していた。

削平された墳丘の北側は、ローム面まで掘削がおよび、主体部の玄室を構成する根石まで抜き取られていた。墳丘の規模は30～33cmの径を測る。残存する墳丘部の断面観察では、ロームの上位に部分的に黒褐色土が認められるがその大半がＦＡ混じりの黒褐色土が覆っている。この上層にＦＡ層がほぼ水平に堆積している。主体部の掘り方はＦＡ層の上層から掘り込んでいる。墳丘部に於いて葺石、埴輪列は検出されなかった。

周堀は、１号住居跡の南方が確認できなかったが、ほぼ全周していたと考えられる。主体部の主軸方向上の周堀にはブリッチ状の高まりが残り、屈曲部と突出部が散見される。北西部分には方形状に突出する部分がある。周堀の幅は南西部の一番狭まる箇所で2.5cm、北西部の方形の張り出し部では9.5cmを測る。覆土中にはＢ軽石の純層が堆積する。

主体部は、玄室部が潰滅状態で実態は不明であるが、おそらく両袖型の横穴式石室と考えられる。主軸は、Ｎ－26°－Ｅを呈する。掘り方は、東西長4.3cm、南北長５cm強の隅丸方形を呈し、根石の痕跡が認められる。床面の羨道部よりには小礫が敷かれている状態が残存する。羨道部は、最大長1.5cm、最大幅

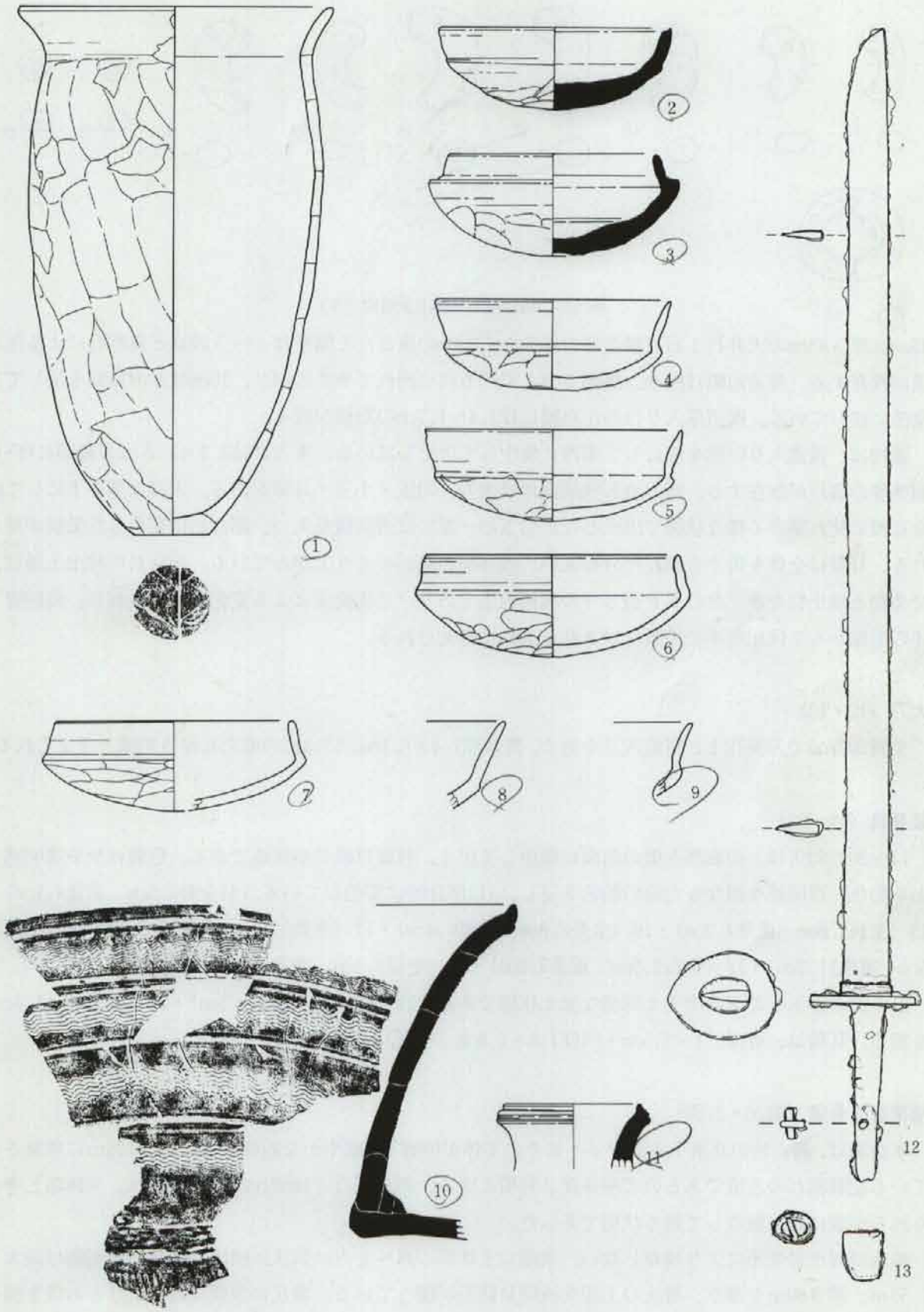


セクション土層註
1層　黒褐色土でＢ軽石を含む
2層　Ｂ軽石純層
3層　少量のローム粒・ロームＢ・ＦＰ・暗褐色土を混える黒褐色土
4層　ローム粒・暗褐色土を含む褐色土
5層　黄褐色ローム土
6層　ロームＢを散在的に含む暗褐色土
7層　3層に似るが締まりが良い
8層　ローム粒・ロームＢを多く含む暗褐色土
9層　ロームＢ・褐色土を含む暗褐色でソフト

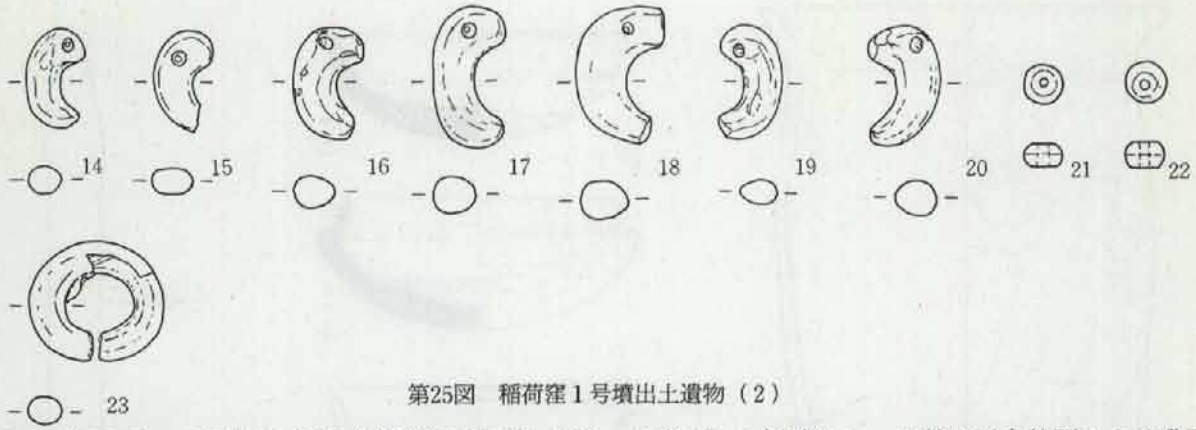
第23図　稲荷窪１号墳周堀

出土遺物（第24・25図１～23）

番号	器　形	法　量(cm)	色　調	胎　土・焼　成	備　考
1	長胴甕	口 21 高 35.9 底 5.1	褐色	粗砂粒　良好	底部木葉痕
2	坏(須恵)	口 11.6 高 4.1	にぶい褐色	粗砂粒　良好	完形
3	坏(須恵)	口 10.4	高 5.2	灰褐色	粗砂粒　良好
4	坏	口 11.9 高 4.6	褐色	粗砂粒　良好	
5	坏	口 13 高 4.7	淡褐色	粗砂粒　良好	
6	坏	口 12.7 高 5.2	褐色	粗砂粒　良好	
7	坏	口 (11.8) 高 (4.5)	褐色	粗砂粒　良好	
8	坏片				
9	坏片				
10	大甕(須恵)				大甕の口縁部片　波状文と沈線を横位に4段施す
11	壺(須恵)				口縁部片



第24図　稲荷窪１号墳出土遺物（１）



第25図　稲荷窪１号墳出土遺物（２）

95cm、厚さ83cmの天井石１石（羨道部の床面から85cmの高さ）と側壁は１～５段ほど自然石による乱石積が残存する。羨道前幅は80cm、奥幅１cmと玄門方向に連れてやや広がり、10cmほどの傾斜を呈して玄室部に続いている。羨道部入り口の左右脇には1.4～1.7cmの石積が続く。

遺物は、羨道入り口部を境にして東西に集中して出土している。東方には2.2×1.５cmの範囲に坏・長胴甕等の破片が散在する。西方の石積前面には大刀・勾玉・小玉・耳環がある。大刀は茎を下にして鋒を石積に凭れ掛ける様な状態で出土した。勾玉の一部には透明観を失い、部分的に変色した徴候が見られる。耳環は全体を覆う金膜が半分程失い、残存部の端がめくり上がっている。装身具の検出土層は、炭化物と焼土粒を多く含むＦＰ混じりの黒褐色土であり、２次焼成による変化と推察される。長胴甕・坏の形態から７世紀前半に位置付けされる遺物と考えられる。

大刀（12・13）

全長79.7cmで刃関孔１と目釘穴２を施す。鍔は径7.4×6.1cm。13は12の直刀に伴う把頭と考えられる。

装身具（14～23）

14～20の勾玉は、前庭部左壁の前面に集中して出土。材質は総てが瑪瑙である。色調はやや透明感のある飴色～透明感を損なった暗い飴色を呈し、14は部分的に変色している。14（全長2.5cm　重量4.1cm）・15（全長2.6cm　重量4.2cm）・16（全長2.9cm　重量6.4cm）・17（全長3.5cm　重量10.2cm）・18（全長3.6cm　重量11.2cm）・19（全長2.9cm　重量5.1cm）・20（全長3.1cm　重量8.3cm）を測る。

21と22の小玉も勾玉の出土と同様な出土状態である。21（径９cm　重量1.2cm）・22（径１cm　1.4cm）を測る。耳環は、外径3.1×3.5cm・内径1.6×1.8cm、重量34.4cmを測る。

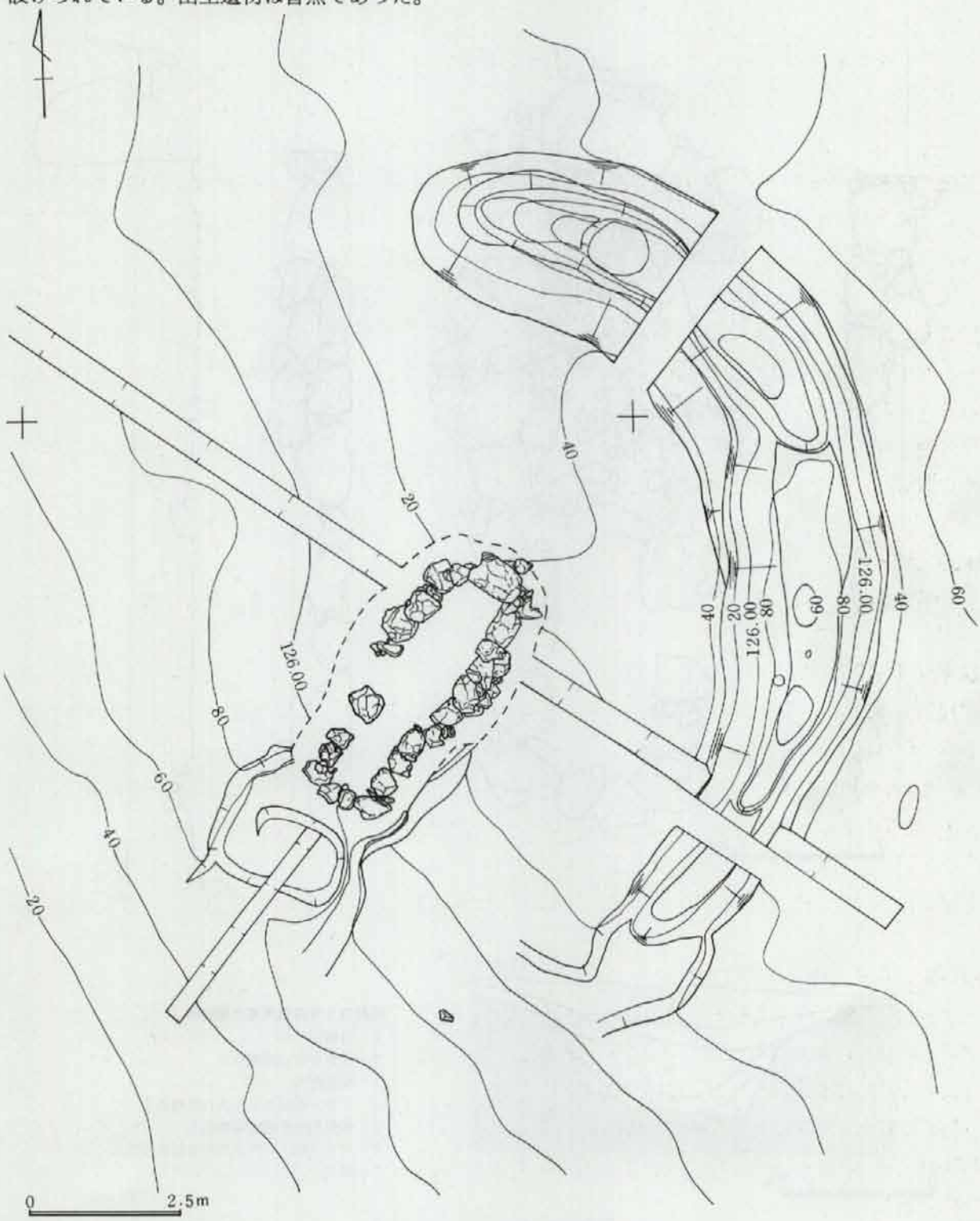
稲荷窪２号墳（第26・27図）

本古墳は、調査区の北東Ｉ４グリットにその主体が位置し、緩やかな西傾斜面の標高126mに構築されている記載漏れの古墳であるので稲荷窪２号墳とする。調査時点では墳丘部が削平され、主体部と考えられる位置に礫が散在して残る状態であった。

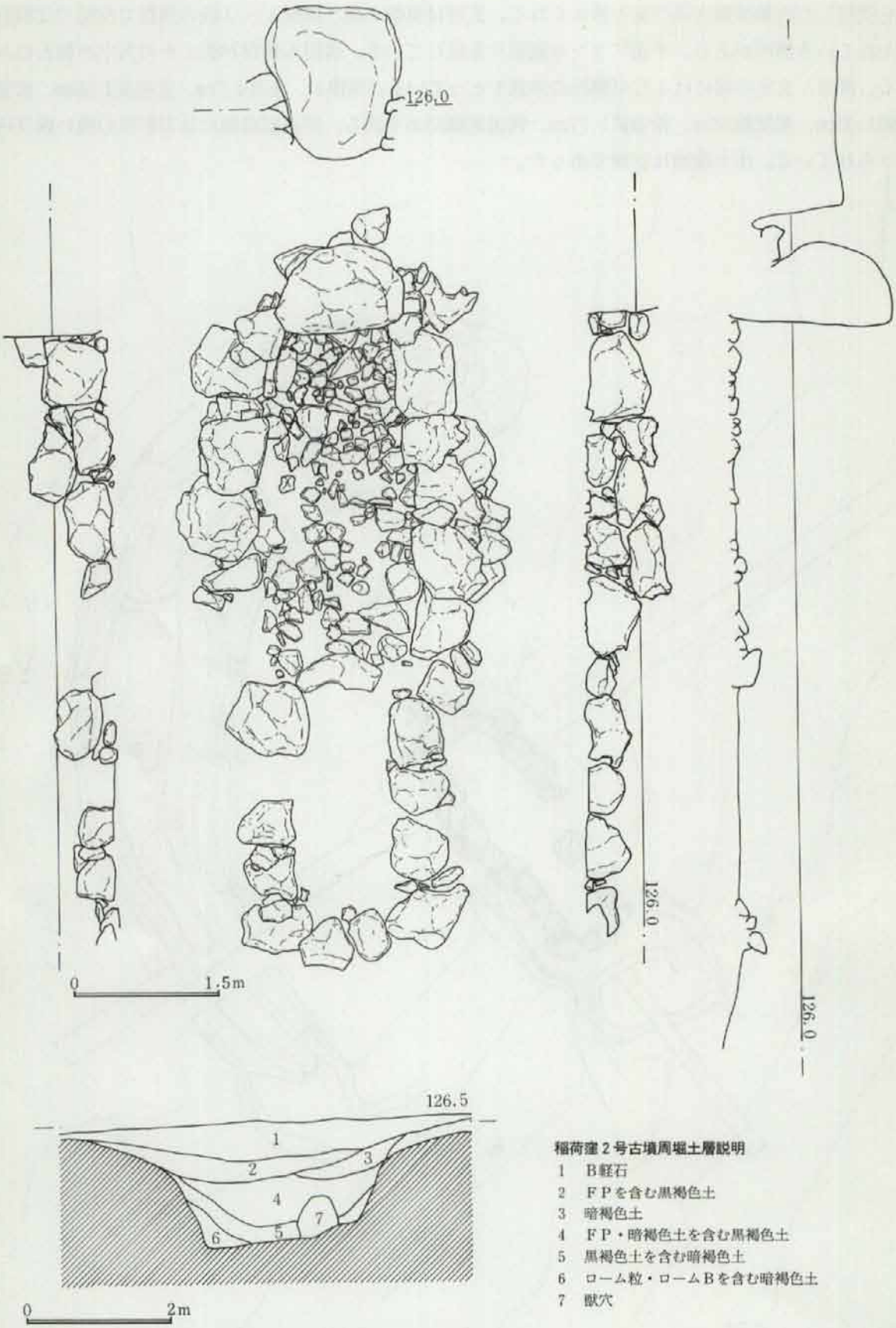
墳丘の封土は削平により残存しない。周堀は主体部の東～北方に弧状に検出された。周堀幅は最大で1.55m、深さ80mを測り、覆土の上面を浅間Ｂ軽石が覆っている。墳丘の規模は約15mほどの径を測る円墳である。

主体部の主軸方向はＮ―37°―Ｅを呈する。その残存は攪乱が著しく内部構造は、明確ではないが自然

石を使用した両袖型横穴式石室と考えられる。玄室は奥壁１段、側壁１～２段の残存で左壁では根石が抜かれている箇所がある。平面プランは胴張りを呈している。羨道も残存が悪くその大半が根石のみである。羨道と玄室の境には１石が梱石の体裁をとっている。規模は、全長4.7cm、玄室長2.50cm、玄室中央幅1.05cm、奥壁幅72cm、羨道長1.77cm、羨道前幅53cmを測る。羨道部前面には方形状の浅い掘り込が設けられている。出土遺物は皆無であった。



第26図　稲荷窪２号墳全体図



稲荷窪２号古墳周堀土層説明

1　B軽石
2　ＦＰを含む黒褐色土
3　暗褐色土
4　ＦＰ・暗褐色土を含む黒褐色土
5　黒褐色土を含む暗褐色土
6　ローム粒・ロームＢを含む暗褐色土
7　獣穴

第27図　稲荷窪２号墳主体部・周堀

Ⅳ　成果と問題点

本遺跡では縄文時代早期～後・晩期に至る土器片が出土。撚糸文・押型文系土器片や早期末の縄文施文土器は、近年の発掘調査に於いて少量ではあるが当町ではその数量が増加している。前期有尾式期の土器片は黒浜式期との関連が追及される。前期諸磯式土器片の出土は上大屋・樋越地遺跡群等があり、数多くの遺跡が存在している。諸磯式期に続く十三菩提式期の土器片は、当町での初見の報告である。

遺構では、縄文時代中期中葉の加曽利Ｅ１式の古段階に位置すると考えられる２件の住居跡と加曽利Ｅ１式前後期と併行期と考えられる大木８式系の埋設土器を伴う住居跡を検出した。１号住居跡の埋甕炉に埋設された大木８式系、２号住居跡からは勝坂３式に伴って出土した隆線により曲線文を施す土器（第６図３）は、（註１）群馬県吾妻町郷原遺跡（註）出土の深鉢形土器に酷似し、３号住居跡からは中峠式に類似する下総タイプと総称される深鉢形土器が出土した。

これらの資料は、群馬県に於ける中期中葉末の在様を垣間見ることのできる重要なものである。本県の地理的な条件から加曽利Ｅ式土器の成立前後段階は、中葉の主流を占める勝坂・阿玉台式とカッパの通称で知られる三原田式土器、焼町式、中峠式、大木式等の周辺の文化が相互間に影響して複雑な様相を呈している。これらの共伴関係が認められる県内の遺跡には、（註２）国分寺中間地域遺跡、（註３）三原田遺跡、（註４）行幸田山遺跡、（註５）竹沼遺跡、（註６）三島台遺跡等がある。さらに、新出の異系統型式と考えられる２号住居跡出土の曲線文土器がある。これらの異系統間の複雑な土器様相を解明していかなければならないのが今後の課題である。

３号住居跡は８世紀前半に比定されると考えられるが、唯一の住居跡である。古墳時代後期に位置付けされる４号住居跡は、同台地上の北方に続く稲荷窪Ｂ遺跡に集落が広がる。

稲荷窪１・２号墳は、茂木古墳群の南西部に位置する。２号墳では、入り口部に於ける遺物の出土状況が特異的である。おそらく、前庭部に於ける祭祀の様相を呈しているのであろう。

（註１）郷原遺跡 昭和60年 吾妻町教育委員会

（註２）上野国分寺僧寺・尼寺中間地域　関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第12集　1986　群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

（註３）三原田遺跡第２巻（中期前半～後半初頭期篇）　1990　群馬県企業局

（註４）行幸田遺跡―渋川市発掘調査報告書第12集　昭和62年　渋川市教育委員会

（註５）Ｆ１　群馬県藤岡市竹沼遺跡　昭和53年　藤岡市教育委員会

（註６）三島台遺跡発掘調査概報　桐生市文化財調査報告書第５集 1981 桐生市教育委員会

写真図版

4号住居址作業風景

1、遺跡遠景（南西より）

2、遺跡真上から

1、1号住居

2、1号住居炉址

3、2号住居

4、2号住居炉址

5、2号住居遺物出土状況

6、3号住居

1、3号住居遺物出土住居

2、4号住居遺物出土状況

3、4号住居完掘状況

4、4号住居遺物出土状況（近景）

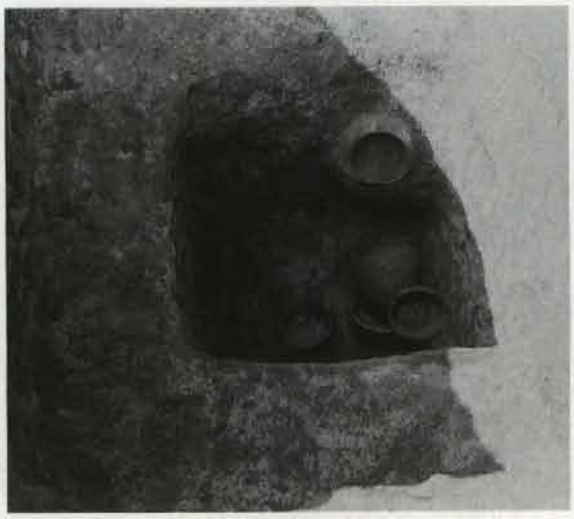
5、4号住居遺物出土状況（近景）

6、5号住居

1、5号住居カマド（前面より）

2、5号住居カマド（前面より）

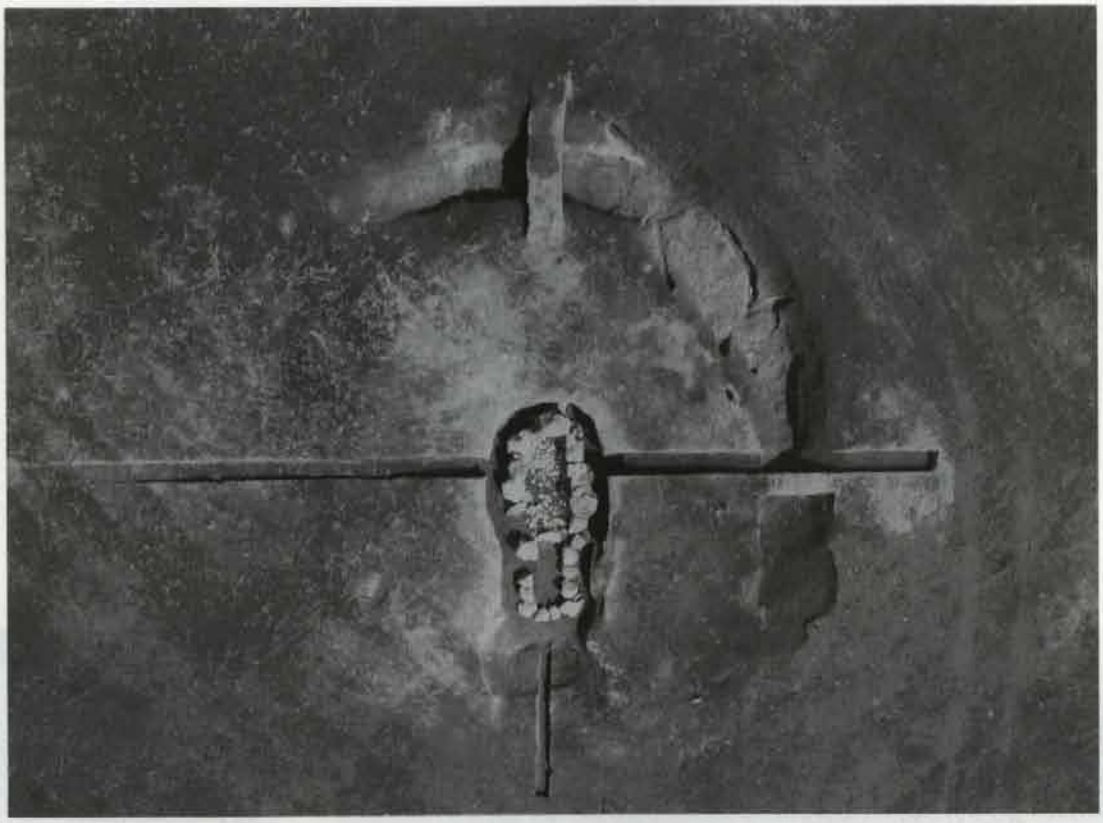
3、5号住居カマド（北より）



4、5号住居貯蔵穴

5、1号土坑

6、稲荷窪2号墳主体部



1、稲荷窪2号墳全景

2、稲荷窪1号墳全景

1、稲荷窪１号墳調査前

2、稲荷窪２号墳主体部入り口

3、大刀出土状況

4、勾玉出土状況

5、入り口部遺物出土状況

報告書抄録

フリガナ	イナリクボ
書名	稲荷窪A地点遺跡
福書名	団体営土地改良総合整備事業茂木地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ
編著者名	山下歳信
編集機関	大胡町教育委員会／〒371-02　群馬県勢多郡大胡町堀越1,115番地
発行年月日	1996年3月28日

所収遺跡名（フリガナ）	所在地（フリガナ）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
稲荷窪（イナリクボ）	茂木稲荷窪（モトギイナリクボ）					平成6年8月20日～同年10月28日	6,300㎡	土地改良

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
稲荷窪A地点		縄文時代～奈良時代	縄文時代中期竪穴住居跡 3軒 土坑 1基 古墳時代後期竪穴住居跡 1軒 奈良時代竪穴住居跡 1軒 古墳（円墳） 2基	縄文時代早期～後期土器片、石器 古墳時代後期土師坏・須恵坏・長胴甕・土師甑 勾玉・小玉・大刀1振・耳環 奈良時代　土師坏・長胴甕・須恵蓋	縄文時代中期中葉における加曽利E1式の古段階の好資料

大胡西北部遺跡群発掘調査報告書第Ⅰ集

稲荷窪A地点遺跡

平成8年3月28日

編　集　群馬県勢多郡大胡町教育委員会

発　行　群馬県勢多郡大胡町教育委員会
〒371-02　群馬県勢多郡大胡町堀越1,115
☎0272（83）1111

印刷製本　朝日印刷工業株式会社